

第 42 回 歴史を生かしたまちづくりセミナー

「野毛山のヒミツ ～どうしてハマっ子の憩いの場  
になったのか?～」

実 施 報 告 書

令和元年 8 月 4 日

公益社団法人 横浜歴史資産調査会  
横浜市 都市整備局 都市デザイン室

第 42 回 歴史を生かしたまちづくりセミナー  
「いぶし銀のまちづくり ～生活・文化の視点から、まちを再評価する～」  
実施報告書

目 次

1	開催概要	1
2	開催記録	5
	(1) 開会挨拶	6
	(2) 講演	7
	(3) ミニツアー	45
	(4) 当日配布資料	48
3	アンケート様式・集計	51
4	広報ちらし	57

(報告書中、敬称略)

# 1 開催概要

- (1) 名称：「野毛山のヒミツ ～どうしてハマっ子の憩いの場になったのか?～」
- (2) 主催：公益社団法人横浜歴史資産調査会(ヨコハマヘリテイジ) / 横浜市都市整備局
- (3) 協力：横浜中央図書館、にしくシティガイドグループ、特定非営利活動法人横浜シティガイド協会、公益財団法人横浜市緑の協会、横浜市水道局、横浜市環境創造局、横浜市西区役所
- (4) 令和元(2019)年8月4日(日) 開場 14:30 開会 15:00
- (5) 横浜中央図書館 B1F ホール (横浜市西区老松町1)
- (6) 参加費：500円 (ヨコハマヘリテイジ会員 300円)
- (7) 申込み：事前申込制 (定員 80名)
- (8) 内容：
  - ・主催者挨拶
    - 宮村 忠 (公益社団法人横浜歴史資産調査会 会長)
    - 久保 良法 (横浜市野毛山動物園園長)
  - ・講演
    - ① 「野毛山はどうしてハマっ子の憩いの場になったのか」  
青木 祐介 (横浜市都市発展記念館副館長/横浜市歴史的景観保全委員)
    - ② 「野毛山配水池の歴史」  
寺井 宏治 (横浜市水道局中村水道事務所長)
  - ・ミニツアー
    - にしくシティガイドグループ (中央図書館～野毛山公園～旧配水池)
    - 横浜市水道局職員 (旧配水池 敷地内)
- (9) 参加者数：約 80名

(10) 当日写真



主催者挨拶  
(宮村 公益社団法人横浜歴史資  
産調査会 会長)



主催者挨拶  
(久保 横浜市野毛山動物園長)



講演①(青木 横浜市都市発展記  
念館副館長)



講演②(寺井 横浜市水道局中村  
水道事務所長)



ミニツアー(にしくシティガイドグループによる野毛山公園)



ミニツアー(水道局職員による旧配水池)



講演会場の様子



受付

## 2 開催記録

## (1) 開会挨拶

### 開 会

(司会：公益社団法人横浜市歴史資産調査会調査役 内山哲久)

### 挨拶①

公益社団法人横浜市歴史資産調査会 会長 宮村忠

**○宮村会長** 本日は、猛暑の中、第42回を数えます「歴史を生かしたまちづくりセミナー」にご参加くださりましてありがとうございます。

まことに嬉しいことに150名を超えるお申し込みを頂きましたが、会場の関係もございまして抽選会を経て、本日は80名の皆様にご参加いただいております。

さて、野毛山と言えば動物園が有名ですが、実は、野毛山は横浜の歴史を語る大切な場所でもあります。明治時代に入り、生糸の輸出で繁栄いたしました横浜を代表する豪商である亀屋・原善三郎のお屋敷や野沢屋・茂木惣兵衛の別荘の他、豪商の邸宅地でもありました。

また、明治中期には、近代都市横浜を支える上水道施設・野毛配水池が設置されました。水源は、遠く現在の相模原市津久井町にあり、ここの取水地から自前の水道道を介して水を運んでいました。

丸いドーム状の可愛いらしい建屋はその当時の生き証人です。その他、野毛山公園として和洋折衷の庭園などもあり、横浜市民の憩いの場所として親しまれて来ました。

本日のセミナーは、第一部は野毛山の歴史を学ぶ、横浜都市発展記念館の青木先生による講演と横浜市水道局寺井様によるご講演を、さらに第二部は、野毛山の歴史を体感する見学会を行います。野毛山の歴史と文化をお楽しみいただければ幸いです。

### 挨拶②

横浜市野毛山動物園 園長 久保良法

**○久保園長** 最初に、野毛山動物園の歴史からご紹介させていただきます。野毛山動物園は、今年の4月1日で開園68周年となります。1951年、昭和26年4月1日に開園いたしました。現在は約100種、2,500の動物を飼育しております。

この長い歴史の中で、代表的な動物もおります。最も有名なのはインドゾウの「はま子」でしょうか。はま子は1951年4月17日にタイから来園し、2003年10月7日、59歳で亡くなりました。はま子が暮らしていた場所は、現在ひだまり広場とひだまりカフェとなっており、休憩棟、軽飲食の販売スペースになっています。

また、フタコブラクダの「ツガル」も覚えておられる方が多いのではないのでしょうか。1982年12月17日に青森の観光牧場から来園しました。年を取り、足が悪くなって立ってなくなりましたが、その後も元気に日々を送り、人気者となりました。2014年5月23日に老衰のため亡くなりました。推定38歳、世界最高齢でした。ツガルが暮らしていた場所は、現在ミナミコアクリクの「アサヒ」の展示場になっています。なお、参加者の皆様への配布物の中にポストカードがありますが、こちらはツガルの写真となっております。

今現在生きているたくさんの動物たちもおります。野毛山動物園、金沢動物園、ズーラシアと、横浜には3つ動物園があるのですが、8月の土日には、夜間開園をやります。通

常は4時半で動物園は閉まりますが、夜の8時30分まで時間を延長して、ふだん見られない夜の動物たちを見ていただくというイベントです。本日もやっていますので、ぜひこのセミナーが終わった後、そのまま動物園に足を運んでいただければと思います。また、配布物の中にこういう青いチラシが入っていると思います。これは大人の方向けですが、生ビールの50円引きチケットになります。本日はお暑いですので、ぜひご利用いただければと思います。

それでは、この後、外を回られるときは水分補給等、十分に気をつけて参加していただければと思います。どうぞよろしくお願ひいたします。

## (2) 講演

講演①「野毛山はどうしてハマっ子の憩いの場になったのか」

横浜都市発展記念館 副館長／横浜市歴史的景観保全委員 青木祐介

○青木祐介 皆さん、こんにちは。ただいまご紹介いただきました都市発展記念館の青木です。今年の夏のセミナーは野毛山がテーマだということで、まず私のほうからは野毛の街ではなくて野毛山の歴史について、横浜が開港してから戦後までをざっと最初に振り返ってお話をしていきたいと思います。今日、皆様のお手元には今日のお話の骨子をメモしたものと、それから関係の資料をお配りしております。ちょっとこれから照明を落として、たくさん写真を見ながらお話を進めていきたいと思います。お手元が暗くなってしまうので、こちらの資料はまた後で、今日の話振り返ってごらんいただければいいかと思います。

まず今の野毛山の位置関係を確認しておきたいと思います。私たちが今いるこの中央図書館はここですね。そして皆さん、桜木町のほうからいらっしゃるかと思いますが、私は職場が関内ですから大体この都橋を渡って、ずっと野毛坂を上っていきます。そして、野毛山公園というのは、この中央図書館の目の前の緑のエリアですね。この奥には、先ほどご紹介のあった野毛山動物園、それから今日この後話があります水道の配水池があって、この奥までが野毛山公園ということです。今日、話の中ではこの、今、老松中学校になっているエリアですね。それから、今、団地になっているこの場所、このあたりも話の中には出てまいります。

では、開港のときにさかのぼって話を始めたいと思います。横浜が開港したとき、もともと幕府が神奈川の東海道筋から離れたちょっと不便なところを開港場に設置したものですから、横浜へ行くのに新しく道を通さなければいけなくなったわけです。それで、横浜道という道をつくって開港場へと行きます。それで、当時の双六にうまいぐあいに描かれていますけれども、これがずっと東海道です。そこから、芝生村、現在でいいますと横浜駅の前の浅間下のところですが、そこからずっと道をそれて行って、新田間橋、平沼橋とずっと今も道路が残っていますけれども、そこから外れて、そして戸部の裏のところの山を切り開いて、ここで野毛の街へおりていきます。ここはいわゆる野毛の切り通しといわれています。ここで野毛を描いていますが、これが現在の都橋なのです。それを渡って、まだ新田が広がっておりますが、ここにも太田橋と書いてありますが、これが吉田橋です。吉田町を渡って、この開港場へ入ってくるという、こういうルートの道がつけられました。ちょっとほかの浮世絵もあります。有名な五雲亭貞秀が描いた、野毛の切り通しを横浜に向かう人たちが通っていく様子です。この切り通しから見通した先に開港場が広がっているということで、この切り通しを下って行って、野毛橋を渡って開港場へと向かっていく、そういうルートが当時描かれています。また別のものですね。切り通しを通って行って、野毛の街を通過して、ここに野毛山がありますね。野毛橋を渡っていくという。つ

まり、開港した当時の野毛山地区というのは、開港場に入っていく入り口だったわけです。

さて今、野毛山公園の中に佐久間象山の顕彰碑というのが建っております。佐久間象山という人は、ペリーが2回目にやってきたときに幕府と交渉して、幕府は最初、下田港を開くという提案をペリーにするのですが、そういう話を聞いた象山は、下田ではいざというときに軍事上の面で非常に都合が悪いと、もう少し内側の横浜を開港場にすべきだということを幕府に進言する。それは受け入れられなかったのですが、そういういきさつがあって、この野毛山公園の中で佐久間象山の顕彰碑が、戦後になってからですけれども設置されたという経緯があった。ただ当時、佐久間象山は、軍事上の意味合いで下田ではなく横浜ということであったのに、まさかこんなに貿易港として大きくなることというのは想定していなかったのではないかと思います、そうした由来の碑というのが野毛山公園に今、建っています。そうして、さまざまな旅人が通るようになった野毛の街です。これも今の都橋のあたりですね。野毛橋と書いていますので、そういう幕末の姿というのが描かれております。

明治になってくると写真がいろいろと残されておまして、こういう感じの、沿道沿いに町屋が並ぶような、そういう野毛の街並みがつくられていくわけです。その中で、野毛の山には幾つか施設が誕生します。その一つが病院です。外国人居留地のほうでは外国人の医師による病院というのができておりましたが、日本人による病院として初めて誕生したのが十全医院で、これが現在、老松中学校のある敷地にできます。明治6年の終わりごろにこの病院ができて、明治7年に十全医院という名前がつけられます。ちょうどこれは明治7年のころの、でき上がったころの写真で、まだ伝統的な和風の瓦を張りつけたなまこ壁に洋風のよろい窓がついた和洋折衷の姿をした建物が当時ここに建てられたことがわかります。

明治7年から10年ぐらいの実測図が残っておりまして、この野毛山のあたりを見てみますと、先ほどの切り通しがこの道です。このギザギザしたものは山ですが、山を切り開いてこの切り通しです。ここを真っすぐおりていくと、今の都橋になります。今はこの野毛坂のところは、切り通しから真っすぐ日ノ出町のほうに道路が通っておりますが、まだ明治のころはないのです。真っすぐ野毛坂を上っていったところに、今の十全医院、ホスピタルですね、なぜか「s」が逆さまになっておりますが、ここにあったということで、今、私たちのいる図書館というのはここです。ここには、明治10年代、老松学校と書かれていますが、学校ができる。後の老松小学校にあたります。今、図書館の前でぐるっと道が曲がってずっと上っていきませんが、まだこのころは、この先はほとんど畑地になっているという状況です。こういう中に病院であったり学校であったり、そういう施設が建てられていく時代になります。

この時代におもしろいものが野毛山にできておりますが、花やしきが一時期この場所にあったのです。野毛の植木商で川本友吉という人物が野毛の山に花やしきをつくったことが知られておまして、ちょっと難しい字を書きますが、四時皆宜園といいます。四時ですから春夏秋冬、4つの季節ですね、一年中花よろしき園という意味でしょうか。こういう花やしきができておまして、大体ここに門があって、こういう道が曲がっているところからすると、ちょっと図書館の上のあたりです。今、恐らく駐車場になっているあたりだと思いますが、そこに花を売る、あるいは花を見ることができ施設をつくったということです。この花やしきはそれだけではなくて、当時の言葉として、メイズです。英語のメイズですから、迷路です。そういう、ちょっと遊びの要素があるのです。迷路が花やしきの中につくられていたということが記録に出てきまして、歴史の教科書によく名前が出てくる仮名垣魯文という戯作者で、文明開化の世相を描いた「安愚楽鍋」というのを書いた人ですが、仮名垣魯文の発案でここにそういう迷路をつくったとあります。仮名垣魯文は自分でも新聞を発行するのですが、新聞といっても貿易の情報を載せるような大きなものではなくて、読み物を中心としたものです。そういうものを発行して、市民が自由にこういう新聞などをお茶しながら読めるような新聞縦覧所、茶店をつくります。その名前がここに出ています、窟蟻（くつろぎ）というのです。この花やしきがあって、そのお隣

に新聞が読める窟螻蟻という茶店、そういうものが港を見晴らす野毛の山のよい場所に、明治10年代にできた。ただ、すぐになくなってしまったようです。さすがに房総半島はここから見えないですね。三浦半島の間違いだと思いますが、本牧の海を見晴らすところにこうした市民も楽しめる施設があったのです。

この植木商のお店については銅版画が出ておりまして、大体明治10年代後半ぐらいの姿ですが、老松町の川本友吉という植木商の花やしき、ここにちょっと小さくて見えませんが、皆宜園というふうに書かれております。一番奥の更地になっている、ここが迷路のあったところではないかなと想像しますけれども、迷路はすぐになくなってしまいましたのでこの銅版画には描かれていないのですが、こういうものが図書館のちょっと上のところにあったということです。

そういう市民の親しみの場でもあるということは、野毛のたくさんの方々の写真からもわかります。ここだけではなくて、今の伊勢山皇大神宮のあるあたりとか、野毛山一帯というのは非常に桜のきれいな場所として、明治時代からたくさんの方々が訪れる名所になっていて、古くから桜の名所だったということが残された写真からわかります。

桜だけではなくて菊の花、こういう写真ですね。野沢の菊というふうに知られていましたけれども、秋の時期になるとこうした菊の花を鑑賞できる庭園があったということで、このNOZAWA'S GARDENです。野沢というのは、横浜の貿易商で茂木惣兵衛という人がいましたが、この茂木惣兵衛のお店が野沢屋という屋号を持っていて、茂木の邸宅が野毛の山にあったのです。その中で、茂木は自分のところで菊を栽培して、それを市民に開放していて、それがこうやって野沢の菊というふうに広く知られていったわけです。先ほどの銅版画には茂木惣兵衛の野毛山の家もこんな感じで描かれておりまして、場所かというと、現在、動物園があるあたりですから、野毛坂をずっと上っていったところに、恐らくここですね、これは通用口のような感じがしますが、こういうお屋敷が奥に広がっていたことが描かれています。これは表側の図だと書かれています、裏側の図というのも残っております。先ほどのお屋敷の反対側が描かれています。手前にずっと下がっていく道があるので、これが恐らく今、動物園のあたりから下っていく水道道にあたるのではないかなと思います。こういう貿易商たちの別邸で市民が花を鑑賞するという、そういう時代だったのです。

もう一人、野毛山に別荘を構えていた人物が原善三郎という、やはり横浜の大きな貿易商人です。原家の場合は、屋号で亀屋というのがありましたので、亀屋の野毛山別荘として、同じくこういうお屋敷が描かれております。今、この図書館の前はぐるっと坂道が曲がっておりますが、それがここです。坂をずっと上っていくと、先ほどの茂木家の野沢屋の別邸にあたるということですから、ここにこういう大きなお屋敷が建っていたと。2階建ての西洋館がここに建っております。左側を見ると、少し小高い丘のようになっております。先ほど紹介しました佐久間象山の顕彰碑などが今あるあたり、少し高い場所になっておりますが、それがここなのだろうと思います。やはり原家も、季節によってはここのお庭を市民に開放するようなことをやっていて、後にここに野毛山公園ができますけれども、明治時代というのはほとんど横浜の中に公園と呼ばれる場所はないのです。もちろん、山手公園あるいは横浜公園は明治の早い段階でできますが、あれはそもそものきっかけは外国人との交渉の中でできておりますから、日本人の文化の中に公園というのがまだ根づいていないのです。そのかわりに庭園です。江戸時代であれば神社の境内など、明治時代になってくると、こういう豪商たちが自分たちの別荘のお庭を開放する。そういうものを一般の人たちも楽しめるというのが明治時代の庭園文化だということが言えるかと思えます。原家のお屋敷に関してはなかなか資料がないのですが、三溪園の持っている写真の中に、先ほどの西洋館のちょうど表と裏、両方にベランダがついている写真が残っております。

そうやって、野毛山に日本人の商人たちが別荘を構えていくということ、少し大きな横浜の都市の中で考えてみますと、今日、ちょうど図書館に入ってきたところのコーナーの展示でいろいろなパネルが出ていましたが、この地図も大きくパネルになって出ておりました。大正時代の横浜市です。これがわかりやすいのは、丘を緑で表現しているという

ことで、横浜が港を中心に発展してきたということがよくわかる図ですけれども、ここが関内です。横浜が開港したときには、外国人の商人たちは地図でいうとこの左側に店を構えて、それから、日本人の商人たちはこの右側に店を構えて、その間には横浜公園と日本大通りがあるということで、きれいにゾーンに分かれた街の割り方だったのです。外国商人たちが自分たちの商館を構えているところに加えて、さらにこちら側の丘です。山手から根岸にかけての丘に家を構えていきます。同じように、まるで合わせ鏡のように、日本人の商人たちはこちら側の丘、野毛山のほうに家を構えていくという構造であったことがよくわかります。大正時代の野毛山を、地図で確認していきましょう。切り通しがこう来ています。ここからぐっと曲がって行って、都橋のほうへと抜けていきます。先ほど紹介した十全医院、病院と野毛の学校はまだです。ここからずっと野毛坂を上っていきます。この真ん中のところが、先ほどの原家の別邸です。ただ、このときはもう原家は2代目、原富太郎です。富太郎というよりも原三溪といったほうがわかりやすいかと思います。原三溪さんは、本牧の三溪園に家ができてそちらのほうに移っておりますので、ここのお屋敷は住んでいなかった。ということで、ここのお屋敷は市長公舎、市長の住まいとして横浜市に貸し出していました。さらに上っていったところに茂木家のほうの別邸があります。今日はこの後、水道局の寺井所長からお話がありますので、こちらの浄水場の話は、私はカットいたしますが、この山の上には明治20年に野毛山の浄水場が完成しています。

今、原家と茂木家のお話をしましたが、もう一人紹介しておきたいのがこちらの場所です。ここに平沼専蔵という、やはり横浜を代表する実業家が住んでおりました。彼のお屋敷も銅版画になって残っておりまして、これもまた非常に立派なお屋敷があったことがわかります。和風の御殿のほか蔵が見えますね。それから塔のついた西洋館と、こういう壮大なお屋敷が、この図書館の向かい側の敷地に建っていたのです。ここが野毛坂です。そして、切り通しがこちらです。だから、今、この手前のところに平沼専蔵がいたころの塀が残っております。この後、まち歩きをするときにじっくり見ていただきたいと思いますが、非常に立派な石積みの擁壁が残っております。ちょっと上がっていきますと、擁壁の上に赤れんがの塀が乗っています。歴史的建造物としては、旧平沼専蔵別邸亀甲積擁壁という名前がついています。亀甲積です。カメの甲羅のような六角形のもので、通常の伝統的な石積みの擁壁ですと四角い石を並べて積んでいく布積みというやり方がありますが、これは六角形の石を丁寧に細工しながら積んでいくという、非常に立派な壁です。

そういう意味では野毛山というのは日本人の豪商たちの住む場所であり、数は限られていますが、高級別荘地の趣もあったということが言えます。それを数字で紹介をしてみたいと思いますが、私の元上司で、今、横浜居留地研究会の会長をしています斎藤多喜夫さんが、以前、横浜のいろいろな地区の性格づけを調べておられた中で、このおもしろい資料を紹介しております。明治26年の情報なのですが、当時、横浜市に税金を納めている人は誰が幾ら納めているのかという、街ごとのリストがありまして、ここに平沼専蔵が登場します。本町2丁目の平沼専蔵が、当時5万7035円という税金を納めています。ほかを見ても、箕田長三郎、若尾幾造、三井守乃助、そうそうたる名前が続くのですが、それにしても5万7000円という、群を抜いた税金を納めていた実業家だったということがわかります。この5万7035という数字を超える納税者というのは、あと2人います。その2人を紹介します。「弁天通之部」に出てきます、5万8232円の弁天通2丁目の茂木惣兵衛です。それから、5万7350円の弁天通3丁目、原善三郎ということで、平沼、原、茂木という当時の納税者トップ3がこの野毛山に住んでいたのです。

野毛山浄水場については、この後の所長のお話にとっておいて、私は写真だけ紹介をしておきます。近代水道が明治20年に開通したときに、この山の上 こうした浄水場がつくられて、はるか相模川の上流から横浜まで水道を引っ張ってきていました。野毛山というのは市民たちの憩いの場であると同時に、市民の暮らしを支える場にもなっていたこと

が、こうした水道の施設からもわかります。

ただ、これらの街も、大正 12 年の関東大震災によって一旦壊滅してしまいます。大正 12 年 9 月 1 日に関東大震災が発生いたしますが、これは当時、今の関内の駅前、常盤町で写真館を営業していたカメラマン岡本三朗が撮影した震災の直後です。地震の揺れの直後で、人々ががれきの中から出てきて逃げ惑う瞬間を捉えたものです。うっすらここに塔が見えているのですが、これが当時の横浜市役所の建物です。明治時代はこういう塔のついた建物でしたが、その少し海側のところから撮った写真なのです。この写真が貴重なのは揺れた直後に撮影されたということで、横浜はこの後一斉に火災が発生して街全体が焼き払われてしまいますので、火災発生前の瞬間を捉えた貴重な写真なのです。横浜の街は関東大震災でほぼ壊滅をしてしまいますが、家を失った人たちは鉄道で親戚を頼りに横浜を離れて行って、横浜は当時人口が半減するほどの大きな打撃をこうむったのです。港の被害状況ですが、このときかろうじて壊れずに残った赤レンガ倉庫などが現在まで残っているわけです。では、野毛の様子はどうだったかということですが、この地図も今、図書館でやっている入り口のところのパネルで紹介されていました。

ここの図書館がお持ちの資料なのですが、震災のときに何時にどこで火災が発生して、その火の手がどう動いていったかというものを気象台が記録したものです。早いものではもう 12 時の地震の直後から、その後、また時間を経る中、あちこちで火災が発生して炎が広がっていったということが明瞭に記されております。時折、こういう渦巻が入っているのは、いわゆる火災旋風と呼ばれる炎の竜巻が発生しているのです。こういうもので、横浜の市街地というのは一昼夜で焼き払われてしまいますが、この地図でいう左端のところ、ちょうど野毛山のこのあたりのところが焼けるぎりぎりといえますか、焼けどまりの範囲になります。ここの一角、ちょっと見にくいかもしれませんが、都橋を渡って行って野毛坂を上っていった、ちょうどここが野毛坂の交差点ですから、今紹介しました平沼専蔵の敷地のところは全焼を免れておりますけれども、そのほか、ここにあった十全病院とかは、地震の被害に加えて火の手に巻き込まれて焼けてしまったことがこうしたところからわかります。

同じく、前川謙三というカメラマンもこの地震の後、横浜市あるいは神奈川県などの依頼を受けて、被害を受けた場所をずっと記録をして回っております。彼の写真帳には野毛山の被災風景も出ておまして、これは市長公舎と書いてありますので原家のお屋敷の跡です。これは洋館か、あるいは向こう側に描かれていた蔵かもしれませんが、ほぼ壊滅をしております。それから、平沼邸の門の部分です。ここは、門は残っております。それから、野毛山というタイトルがついていますが、この建物が先ほど銅版画に出てきた平沼家の洋館です。これは大きな被害を受けずに残っていたということがわかります。それから、完成した野毛山浄水場のところもこうした被害に遭ってしまったということで、震災の被害から復興していくところから野毛山公園の昭和の歴史が始まっていくこととなります。

ここでようやく関東大震災からの復興計画で、それまで横浜市にほとんどなかった公園を市内につくっていくこととなります。当時の計画図なのですが、関東大震災をきっかけに誕生した公園というので、一番有名なのは山下公園です。海辺のところに震災のがれきを処分してそこを新しく公園にしたものですが、このとき、国の復興事業でつくられた公園というのが全部で 3 つありまして、今の山下公園と、もう一つがこの野毛山公園です。そして、3 つ目はちょっと小さいのですが、神奈川公園です。大きな位置づけとしては、山下公園が臨海公園であるのに対して、野毛山公園は中央公園という位置づけ、さらに、市街地の中にある市街公園として神奈川公園というように性格づけをして 3 つの公園がつくられております。そのほかのものは、例えば横浜公園であるとか元町公園などは横浜市の事業として整備をされたところ です。

大きく被害を受けた野毛山の原家と茂木家の別荘の跡を新たな公園用地として、野毛山公園は誕生します。最初の計画図というものがこういう形です。この左上がもともと原家の別荘のあったところ。そして一番上、今は動物園になっているところが茂木家の別荘跡。そこに水道の施設の場所を加えて、ここに関東大震災の後、新たに水道の配水池がで

きますが、さらにその奥にも公園用地を確保して、あわせて、ここを洋風の庭園、こちらを和風の庭園、こちらを折衷の公園というように、園内でも3つの区別をしてつくられます。ちょっとこのままでいくとわかりにくいので、ひっくり返したほうがいいですね。こういう感じです。野毛坂をずっと上っていきます。その右手には原家の屋敷跡、上り切ったところには茂木家の屋敷跡、そして、水道の跡地のところには洋風公園という、こういう形です。これがほぼ現在の野毛山公園の全体像になります。ただ、最初はまだ今の入り口のあたりが公園の計画に入っていなかったものですから、そこはまた新たに土地を取得してつけ加えて、最終的に今の形になります。

それぞれのエリアごとの様子を紹介していきます。最初のところ、ここは図にもありますが、六角形のあずまやと遊具を置いた高台のところ、今、中村汀女の句碑があるあたりになります。こういう滑り台などを置いて、子供たちが遊べる場所になっています。向こう側に、今の図書館の建物の前身にあたる横浜市図書館というものが昭和2年にできていますが、これが見えております。復興していく横浜の街並みを眺められるいい場所だったということがわかります。そして、もう少し行ったところに、かつての原家の別荘跡だったところが、こういう噴水のある公園になっています。佐久間象山の碑があるところが、このちょっと上あたりになります。それから、ずっと上がっていった、今の動物園のところにあたります茂木家の跡地の場所はなかなかいい写真がないのですが、大池という、この池の出っ張った形の、ちょっと後でまた話をしたいと思います。こういう池の部分。それから、池から流れる流水のところにかかっている橋だとか、こういう姿で昭和の初めに完成します。洋風公園のところは、現在、広場になっているところですが、こちらが花壇を備えた洋風の公園。その手前のところに、関東大震災の後、新たにつくられた野毛山の配水池です。今日はこの敷地の中に入れていただけということで、こういう感じの、この下が巨大な配水池になっています。この奥に洋風の公園がつけられ野毛山公園が完成します。

関東大震災からの復興というのは、大正12年、地震が起きた後から昭和3年ぐらいまでの間に段階的に事業を行っていきますので、ちょうど昭和3年度が終わった昭和4年の4月に一区切りということで、昭和天皇もやってくる復興記念の式典が開催されます。4月23日に横浜公園に球場がつけられますので、スタジアムの中に昭和天皇を招いて大きな式典が開催されます。その後で祝賀会ということで、翌日の4月24日にここの公園を祝賀会の会場にするわけです。場所は、この水道の配水池の奥です。恐らくこのあたりだと思っております。こういうところにステージをつくって祝賀会を開催いたします。これはそのときの様子です。震災の復興事業を指揮した、当時の有吉市長が式辞を述べているところです。この日、たくさんの方がこの祝賀会に、野毛山に詰めかけたということで、先ほどの噴水の周りにこれだけたくさんの方がおります。それから野毛坂はこういう感じで、平沼家の石積みの擁壁が写っておりますが、こういう祝賀会の様子が写真で伝えられております。

この後、幾つか施設を紹介したいと思います。もう一度戦前のところを地図で確認しましょう。今お話しした震災復興でできた野毛山公園というのがここまでの範囲です。ここが公園の入り口になって、先ほど見ました、遊具のある折衷型の公園。そして、丸い噴水のある和風の、茂木家の跡地の池のある公園。それから、野毛山の配水池。そして、洋風の公園という形の、これだけの広い公園が誕生したということです。ここにさらにつけ加えたいのが、ここにある老松小学校です。震災前まではここの場所にあったのですが、かつての十全病院の跡に移転してつくられます。それから、今、私たちのいるこの図書館です。もう一つ、ここの平沼専蔵のお屋敷ですが、ここは焼け落ちなかったもので、そのまま使い続けられました。先ほどの大正時代の地図と比べますと、切り通しのところの道路がぐっと広げられています。ここに線路が描かれておりますが、路面電車がこの前を通るようになります。これは震災後の野毛の街を撮った写真なのですが、ちょっと見上げますと平沼邸の洋館が写っておりまして、震災前のものがそのまま解体されずに昭和になっても残っていたことがわかります。

そして、小学校です。関東大震災の時点ではまだ現在のような鉄筋コンクリートの小学

校の校舎は1棟しかなかったのですが、その1棟が震災で被害を受けずに残ったこともあって、関東大震災の後、横浜市は小学校の校舎31校を鉄筋コンクリートでつくりまします。これがいわゆる復興小学校といわれているものですが、老松小学校もその一つなのです。大体はこの敷地の端に校舎をつくっておいて、やはり当時は災害時の避難経路というものが考えられていましたから、通常の階段以外に、横浜市の場合、スロープを校舎の中に設けていました。いざというときの避難路、いざというときに子供たちが階段に集中して被害の拡大がないようにということでスロープが設置されたのです。そして、運動場に体育館をつけ加えたセットが震災後の横浜市の小学校として、一つの型としてつくられていきます。公園の様子も空から見るとよくわかります。先ほどの遊具のある場所、それからこの噴水の場所というのも空から見ると大変よくわかります。

そして、この図書館です。これも非常にユニークな建物といえますか、明治時代のような西洋風の様式というものから少しずつ装飾がなくなっていった、のっぺりした壁なのです。でも、ひさしなどを見ても、うまくコンクリートで曲面をつくって形を工夫していますが、こういう公共施設、先ほどの小学校も含めて当初は横浜市の建築課という組織が担っておりました。彼らは震災復興で非常にたくさんの公共施設を復興しなければいけなくて、その中の一つにこうした図書館も入っていたのです。ここは、今の手前の坂のところなのです。ですから、昔は坂からぐいっと上がっていったところに図書館の入り口があったことがわかります。

この図書館の少し上がったところに震災記念館というものができます。これもやはり横浜市の施設ですので、横浜市の建築課が設計をしてつくられています。タイル張りの建物ですが、角のところを入り口にしてつくられています。名前のとおり、関東大震災の記録を残しておくため、震災の関係資料を展示する施設として計画されたものなのですが、実はこの震災記念館自体は3代目の建物にあたっていて、今はもうないのですけれども、もともとは横浜小学校の校舎の中につくられていました。これは、当時の横浜市の教育課の課長さんが発案して、関東大震災のときの体験あるいは教訓といったものを後世に伝えるために資料を集めようということで、教育課から市の小学校に呼びかけるのです。そうは言っても、まだ震災の直後だと学校の復興が最優先ですから、なかなか資料の収集には苦労したと伝えられておりましたが、それでも横浜小学校のバラックの中に、まずはこうした施設ができて、さらにその後、花咲町にある今の本町小学校の中にこうやって仮の震災記念館がつけられたのです。

展示の風景も写真が残っておりまして、地震のときの11時58分でとまった時計です。それから、先ほど紹介した岡本三朗の写真など、あるいは焼け残った遺物だとかこういうものが、今から見ると本当に並べられているだけという感じですが、震災直後に資料の収集をして展示した。これが常設の施設として、昭和3年に震災記念館が完成したわけです。この建物、後には震災記念館から名前を変えて、昭和17年には横浜市の市民博物館となり、展示の内容を改めています。ただ、もう戦争中になってそれどころではなくなってしまっていて、昭和19年には閉館してしまいます。震災記念館の建物は、戦後、老松会館と名前を変えて結婚式場になって残っていくわけですが、一つ残念なのは、震災の記録を残すために集めた資料がどこへ行ってしまったのだろうという、これが一番残念に感じることはありません。

東京もやはり横浜と同じく関東大震災の大きな被害があった都市ですから、東京に行きますと両国の駅前に震災記念堂という建物が残っております。もう一つ、同じ敷地の中には復興記念館という施設もありまして、ここで関東大震災の被害を伝える展示が常設されています。横浜に関するものでいうと、震災後に徳永柳州という洋画家が東京のいろいろなところの被災の状況を絵に描いて、それを持って各地を回って義援金を集めたのですが、彼も1枚だけ横浜をテーマに絵を描いています。写実的なものではないと思いますが、非常に巨大な、多分このスクリーンぐらいあるのですけれども、これが両国に展示されているわけです。東京は、両国が震災のときに火災で巻き込まれて何万人という人が亡くなった場所ですから、地元にとってはここが震災の慰霊の場所になっているということ

で、現在でも東京は空襲のあった3月10日と、関東大震災の9月1日に法要が営まれております。横浜市の場合はその慰霊の場所ができなかったというのは少し残念です。

例えば、これは昭和9年のニュースですが、日本郵船の三島丸という船が、関東大震災のときにちょうど横浜港にいて、海上でさまざまな救助に当たった船として知られています。地震のときは横浜市役所も神奈川県庁も被害を受けておりますので、一時期は三島丸のところに仮に役所の人たちも集まってくるのですが、昭和9年に引退するのです。船が処分をされるというときに、関東大震災の記憶を伝えるつり鐘を横浜市に寄贈しますというニュースが昭和9年に出てきます。横浜市に寄贈された鐘がどこに行ったかという、野毛山の震災記念館に展示されていたのですが、それが今、どこへ行ったのかという、本牧にある八聖殿郷土資料館に保管されています。恐らく野毛山にあったさまざまな資料はいろいろなところに行ってしまったのだらうなと思います。まだ誰も追跡調査はしていませんが、一部分はこの中央図書館に貴重資料として保管されていることはわかっておりますが、まだまだその他資料の追跡調査をしなければいけない状況にあるのです。

話がまたもとに戻りますと、野毛山は戦争中、山の上ということで陸軍に接收されて高射砲陣地になります。昭和19年になると、陸軍の中の高射砲第117連隊の本部がこの野毛山に配置されるということで、完全に戦時色になってしまって、市民は野毛山の公園には入れなくなってしまいます。それと、昭和19年といいますと、当時の学童疎開が始まったところで、老松小学校、当時は国民学校と呼ばれておりましたけれども、老松国民学校の子供たちも昭和19年の夏に箱根湯本に疎開をします。横浜市の小学校は大体が県内の箱根のあたりに疎開をしています。そうすると子供たちが疎開をして校舎は人がいなくなるということで、今度は逆に市役所や区役所といった役所がこうしたところに、鉄筋コンクリートですので空襲を避けるために移転をします。秋から少しずつ役所の機能が野毛山にやってきました、市長室はこの老松国民学校の中に、それから市会は図書館のほうへということできざまに分かれて、今度は役所の疎開が始まります。そして、昭和20年の終戦を迎えるという話になります。

戦後の話に入っていきますが、戦後の早い段階で昭和24年に日本貿易博覧会というのが開催されます。戦後復興の一つの流れの中で、貿易振興のためにさまざまな輸出品などを展示する博覧会が開催されたわけです。一つの会場は反町のほうで、もう一つの会場は野毛山公園にということで、公園の中に、これは配水池の一番奥の洋風公園のあったところにこうしたパビリオンが設置されておりました。ここにアルファベットでKODOMOと書いていますが、ただ輸出品とか貿易の関係だけではなくて、例えば子供科学館などでは天体望遠鏡がのぞけたり、あるいは当時はテレビジョンが初めて登場したということで、テレビカメラで同時にモニターで映すみたいな、そういう実験などもこうした博覧会の中では行われておりました。その野毛山公園の一角にこうした野毛山シアター、屋外劇場なども設けられて、博覧会の際の開会式の会場にもなっているのです。

注目されるのは、場所は野毛山ではなくて反町の会場なのですが、子供動物園というのがこの博覧会の際に登場します。このパネルのキリンやゾウは恐らくいなかったと思うのですが、小動物などを子供たちに見せる小さな施設があってそれが好評を博したことで、この後の野毛山に動物園をつくるという流れになっていきます。

そして昭和26年にかつての野毛山公園一帯に野毛山遊園地がオープンいたします。こちらに、現在の動物園、それから配水池を挟んで反対側のところに遊園地ができるということで、幾つか写真が残っております。坂の下のところにこういうゲートがあったと。これは昭和28年の写真です。坂の下にこういうゲートがあって、図書館が見えております。それから、旧平沼邸の擁壁も見えております。ちょっと見にくいのですが、ここにたしか読売何とかの祭りとか書いてあって、恐らくイベントごとにこういう催しものを下げるゲートがあったようです。路面電車が走っていたときなので、線路なども写っています。これが豆電車と呼ばれるものです。こうした遊具が公園の中に幾つもあったと。これは絵はがきになっているものですが、こうしたカート、あるいは懐かしの飛行塔とかで

す。それから、先ほど園長から紹介のあったゾウの、はま子でいいと思うのですが、こうした動物園の様子を写したものが残っています。これがそうですね。ゾウの園舎があって、ここにはま子とその後やってきたマリ子と、2頭写っています。今、ゾウの園舎はありませんので、ここがひだまり広場でしたか、ビールを飲める場所になっているところです。昭和20年代に動物園を含む遊園地ができるのです。

この時期のニュース映像が残っておりますので、今、ここでごらんいただきたいと思います。これは神奈川ニュースとあって、横浜市や川崎市あるいは神奈川県いろいろな行政のニュースを短い1分ほどの映像でつくっているものなのですが、昭和20年代の映像です。1分ほどで切れてしましますが、「子供の天国」という映像を1本ごらんいただきたいと思います。

[映像上映]

○青木祐介 ということです。ちょっと後ろに遊具も映っておりますが、これが当時の動物園の様子です。

それから、もう一本あります。「こんなにうまくまりました」という映像です。

[映像上映]

○青木祐介 ということです。今見ると、ちょっと違和感があるかと思いますが。なぜならば、今は動物園でこうした芸を見せるということはずがないからです。ただ、この開園したときの時代の背景を考えますと、まず遊園地と一体になっているところなんです。当時は娯楽施設として動物園が捉えられていたということが一つ。ですけれども、実際には博物館というのでしょうか、社会教育施設としての役割もあるわけですから、やがて動物に芸をさせるということはなくなっていきます。先ほどもゾウのはま子が出てきましたが、同じはま子というゾウがいるのです。浜松市の動物園のはま子です。浜松市の動物園は野毛山の1年前の昭和25年に開園をしています。同じ年に小田原市でもやはり動物園が開園して、小田原はウメ子です。やはりゾウだということで、実は1950年代に地方自治体でたくさん動物園がつくられています。小田原の場合は、子供博覧会の中でゾウが登場したのがきっかけとなってできていきますし、そうしたさまざまな戦後復興の中でこうした遊園地の中の動物園が誕生します。これはもう時代とともにさまざまに性格は変わってはいきますけれども、そうした流れの一つに、野毛山動物園もあるのです。

動物園の話の最後として、今回、横浜市から図面をご提供いただいたのでご覧いただきます。今の動物園なのですが、ここに入り口があります。ずっと坂を上っていった、ここが入り口です。ここから入って行って、まずここに平場のバードケージがあって、ずっと園路が動物園の周りを回るようになっているのがわかります。先ほどのゾウの園舎というのが今、ここにあたります。ここもやはりちょっと平場になっています。で、ぐるっと園を回って行って、ここに大きな池があります。で、またこの園を回って行って、ここが今なかよし広場ですね。ずっと上がって、ぐるっと一周してまた戻ってくる形になっていますが、今の配置を頭に置いていただいて、少し前の公園の図をここに重ねて見てみると、これは昭和7年、野毛山公園が開園したときです。ここに入った後、平場があります。ここにも平場があります。ぐるっと園路を回って行って、ここに池があります。池からずっとこういう線があります。ぐるっと回ってきて戻ってくるということで、震災後の野毛山公園の地形から、大きな変化はほとんどなく今の動物園が構成されていることがわかるかと思えます。

もう少し頑張って、大正時代の関東大震災の前の茂木の庭園時代までさかのぼってみると、やはりここに平場があり、ぐるっと園路が回って行って、同じような形の池が残っていることから考えますと、ひょっとして茂木邸の時代から大きな地形の変更はなく、現在

の動物園に至っていることが言えるのではないかと思います。そうすると、野毛山動物園は今、市民の博物館施設だということを言いましたが、それは間違っていないのですけれども、それに加えて横浜市の地域史跡のような位置づけもできるのではないのでしょうか。

その後の話を簡単に見ておきます。遊園地はその後、水道の配水池の施設が新たにつくられるということで、遊園地の部分がなくなって動物園だけになります。そのときに横浜市立野毛山動物園というふうに名前を改めて、現在に至っています。

もう一つ、野毛山動物園と公園の関係で重要なのは、現在残っておりますつり橋、歩道橋が昭和46年に建設されるということで、その建設のきっかけになったのが当時の飛鳥田市長です。飛鳥田市長というのは、社会党から市長になった人です。その選挙のときに、彼は直接民主制ということを書いて、直接市民と対話をする、1万人市民集会というものをやるわけです。実際に、これは横浜文化体育館ですけども、たくさんの市民を実際に呼んで、その前で直接やりとりをするということをやっていた市長です。そのときに、この集会の参加者の言葉の中に、今の動物園と公園というのは道路で区切られていて非常に危ないと。その話をきっかけにして、現在の歩道橋というのが建設されるようになったのです。今日この後、まち歩きの中でこの橋も通ることになりますが、向こう側に水道の施設が見えております。このデザインをした人が柳宗理というインダストリアルデザイナーです。さまざまなデザインをしている人です。飛鳥田市長のまちづくりは現在のみなとみらいの建設だったり、6大事業と言われておりますが、そういうものの一つに地下鉄の整備というのがあります。地下鉄の整備にも柳宗理というデザイナーは加わっておりまして、ふだんあまり意識して見ないかもしれませんが、例えば地下鉄の関内駅の黄色いベンチです。座面が黄色いベンチですが、あれは柳宗理がデザインしたものです。彼が野毛山にかける橋をデザインして、それだけではなくて、動物園のサインのデザインなども手がけているのです。これだけだと正面から見るとわかりにくいかもしれませんが、塔からワイヤーで引っ張って橋を支える斜張橋という、斜めに張る橋という形式の橋なのです。野毛のつり橋という名前がついているのですが、多分土木の先生が見たら、これは厳密にはつり橋ではないと言われるかもしれませんが、こういう斜張橋の形をしているものが柳宗理のデザインです。横浜にはもう一つ有名な斜張橋がありまして、それが先ほどの6大事業の成果として完成するベイブリッジです。今日、皆さんこの後通られると思うので、ぜひこの橋の、斜張橋の上から、横浜を代表する斜張橋であるベイブリッジを眺めていただければいいかと思います。

何ともまとまりなく、ずっと時代を追ってきただけになりましたが、開港以来の野毛の歴史をずっとたどっていきますと非常にたくさんの要素があります。今もこの界隈のあちこちでそうした痕跡を見ることができると思いますので、そういうものを少し頭に入れて歩くと、また野毛山が楽しくなるのではないかと思います。では、私の話はこれで一旦終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

## 講演②「野毛山配水池の歴史」

横浜市水道局中村水道事務所 所長 寺井宏治

○寺井宏治 皆様、こんにちは。横浜市水道局の中村水道事務所から来ました寺井と申します。本日はよろしくお願ひします。

本日は、先ほどの青木先生の話とセットで聞いていただけるとわかりやすいと思うのですが、私のほうではまず野毛山配水池ということで、配水池ってそもそも何？というところを簡単に触れます。あとは野毛山というところについては、先ほど先生からもお話があったように、水道にとって歴史の深いところでもありますので近代水道の歴史と、最後に野毛山配水池についてということでご説明したいと思ひます。

まず、配水池についてですが、これは近代水道とって、今も昔も基本的には考え方は変わりません。まず、川から水をとって、それを浄水場に運びまして、浄水場で水をつくるということで水の工場みたいなところですが、そこでつくったものを、最終的に皆さん

の、お客様のところに運ぶところで一回ためて調整するのが配水池の役割となります。今回見ていただくのは、配水池という役割を担った施設になります。配水池ですが、通常時はどういうことかという、皆さんがご家庭で水を、深夜はあまり使わないですよ、朝とか夕方というのは結構水を使いますので、いわゆる使う量が変わってきます。一方で、浄水場でつくる水というのは、水の工場ですので量は変わりませんので、つくる量と使われる量の差を埋める必要があります。右上の図を見ていただくとわかると思うのですが、まず一回浄水場で水を毎回一定につくる。皆さんが使っているとき、比較的使わない時間については使う量が減るので、プールの水かさがふえると。一方で、皆さんが使っている時間帯については、使っている量よりつくっている量のほうが少ないですからプールが減ると。このような流量の調整をするのが配水池の役割ということになります。

水道の歴史です。もともと青木先生からお話があったように開港したわけですが、埋め立てによりできた街ということで、通常、井戸を掘ったりということで水が出ていたのですが、関内とかその辺については海の上でできた街なので、井戸を掘っても塩辛い水しか出ないということで、水を得るために数少ない井戸に群がってしまったり、水を売りにくる水売りというのがいたのですけれども、結構高いお金で水を売っていたというような状況があります。そういう中で、木樋水道です。実はいきなり近代水道ができたわけではなくて、横浜の豪商、いわゆる商人たちが立ち上がって、木の水道管を引いたのですが、なかなかうまくいきませんでした。木のものですから腐ってしまったり、衛生的にも課題だったということがありました。

基本的に当時の県令、今でいう県知事ですが、沖さんという県知事が、下に英国公使パークスがいますのですけれども、関内で多くの外国人が住んでいて、住んでいる外国人からもいろいろな要望が出てくるわけです。英国の公使であるパークスが、横浜で県知事に対して、住民の意向を受けて何とか水道問題を解決してほしいという要望をしていくわけです。そういう中で、実は中国の広東というところで水道を引いて実績を上げた、英国の軍人ですが、中佐のヘンリー・スペンサー・パーマーという技師がいて、パークスが英国の軍人に水道に精通した者がいるのでどうでしょうかと紹介をしたと。県としては、ぜひヘンリー・スペンサー・パーマーさんに水道技術の指導をお願いしたいということで、お願いをしたわけです。ミュージカルが1回行われたことがあります、そういうシーンでもありますように、パーマーさんが計画を立てて県に報告をすることになります。

そういう中で、パーマーさんがまずどこに浄水場を設置するかというようなことを検討するわけですが、海水平均水面、いわゆる海拔と言ってもいいと思うのですが、彼は少なくとも43メートル程度の高さを有する場所に貯水場を設けて、当初140万ガロン流水させるということで、そのときに貯水場、いわゆる浄水場も兼ね備える貯水場ですが、野毛山の山頂に設置するということを決めました。そこで、下の欄にありますように野毛山の標高、海拔43メートルのところに水を自然に流すということをするためにはそれより高い位置から取水をしなければなりません、その位置でいうと、水質の点もありますけれども、多摩川の谷保か、もしくは相模川の中野村あたりにはどうかということで、これが最初に相模原の三井というところから引いた路線ですけれども、最終的には野毛山の浄水場の場所まで引くと。下が高低差の表になりますが、野毛山より高い位置で水を引くということで、高低差を生かして水を流すルートを選定したということで、取水場は三井に決めたということです。

当時の野毛山浄水場、日本で初めての近代水道の浄水場になりますが、給水していたエリアです。本当は山手の山の上とか、その辺も給水したかったのですが、とりあえず給水したのは元町のあたりから高島町のあたりのエリアです。当然、横浜の関内・関外の中心街も入っていますが、このあたりに給水を行っていきました。当時の野毛山浄水場は、先ほど青木先生のお話にありましたように、まずは野毛山に最初にできたのが浄水場ですが、こちらについては、今の配水池のある場所を濾水池といっていますが、最初入ってきた水をろ過する場所として濾水池という場所で一回こすと。その後、先ほど言ったように街に水を送るために一回水をためるといって、主に野毛山の上にこういう浄水場が設置されました。

概要ですが、完成は明治 20 年、標高は 50.6 メートルということで、最初に着水井といいますが、まず入ってきた水を一回受けとめる井戸が 1 池です。内径 3.66、深さ 2.59 ということですが、次にろ過する濾水池を 3 池です。最後に貯水池 1 池ということで、2 日半分の給水量をためられる量を設置したということになります。

なかなかどこがどこというのが正確にはわからないのですが、最初に、これは当時の浄水場の正門になります。これがどのあたりなのかということは、正確に一致したものはないのですが、今日見ていただく配水池の横の道からスロープというか階段があるのですけれども、そのあたりだろうと思われます。

次に、貯水池です。先ほど出ていきましたが、これについては恐らく今、広場になっているところで、左の図で奥のほうに街のようなものが見えているのが関内とか横浜になると思いますので、そちらの 2 個の施設が最初にできたということになります。

続いて、パーマーさんについてはある一定の計画に基づいて、人口を想定してやったわけですが、横浜に予想以上に人口増加があって、当初つくった水道施設、浄水場では足りなくなりました。ということで、1 つはさらに左側に、左側というと動物園から遠い側になります。貯水池を 1 か所増設しました。あとは右のほうに濾水池を 3 池ということでしたが、1 つ増設していますけれども、そういう浄水場としての機能を明治 30 年、設置した 10 年後にはもう拡充しているということになります。

いよいよ配水池の話になります。先ほど言ったように関東大震災が発生して、遠くに見えるのが開港記念会館になると思いますが、あと保土ヶ谷のところの帷子川にかかっている宮川橋という橋がありますけれども、そちらの被害の状況も写真からわかります。先ほどの青木先生のと違う写真ですが、野毛山浄水場も完全に破壊されてしまいました。そういうことで修理ができなくなるほどの壊滅状態になって、結局、これは関東大震災のあった当時の浄水場の図面ですが、これが関東大震災の大正 12 年に発生して全て破壊されてしまったということになります。こちらについては、濾過池、先ほど言ったように水をつくる部分についてどうしようかということで、既に整備されていました西谷浄水場にこの機能を移設しました。ということで、野毛山からは浄水場という機能が西谷に移転ということになったわけです。この後に、では何をつくるかということになったわけですが、こちらがその後、昭和 5 年ごろの図面を比較で載せています。ちょうど濾過池のあった場所を活用して、今度は配水池、先ほど冒頭にご説明しましたように、いわゆる水を調整する機能です。西谷でつくった水を関内あたりに送るのに調整する機能を野毛山に持ってきたということで、こちらについては池が実は 1 つのように見えて、丸い池が 2 つと、あと真ん中に 2 個ぼちぼちとありますが、来た水を 1 回受けとめる井戸と、最後に送る井戸ということで、大きく言うと 4 つの施設ができました。配水池といわれているのは大きく丸い 2 つになります。この 2 つの円形の施設が配水池ということになります。

野毛山配水池ですが、工事着手は震災後の大正 14 年になります。完成については約 2 年間かかりまして、昭和 2 年 3 月ということですが、先ほど 2 つの池をつくりましたということでしたが、配水池としては円形のものが 2 つです。内径は 41.25 メートル、深さは 6 メートルということで、1 池当たりの貯水量としては 6850 立米ということですが、最初に受けとめる井戸をつくりましたということで、着水井といいますが、それについては 1 池です。あと、最後にほぼ同じ大きさで、深さはちょっと違いますが、配水井といって、今度は最終的に街に送るので水を集める施設になりますけれども、それが 1 池ということで、施設としては 3 種類 4 つの施設があるということですが、

先ほどの円形の配水池の図面になります。こちらについては、後で現地を見ていただくとわかるように円形の真ん中にドーム状のものがありまして、それが右の図の真ん中の部分になります。左の図面が、ちょっと見にくいかもしれませんが、これは上から見たところを切ったものです。中の構造を示したもののなのですが、巨大迷路のように外から水が入って、ぐるぐると大きな水路を通りながら、最終的に真ん中まで行ってそこから吸い上げるという構造になっています。実は耐震性の都合で皆様に見えていただけないのは残念なの

ですが、中に入りますとそういう大きな壁があるのです。巨大迷路のようなものがずっとあると。で、真ん中にはポンプで吸い上げる施設があるという、実際、現地を見てみるとそういう施設になっています。

調査時の写真がありますので見ていただきたいのですが、その中でハイウォーターレベルと書いてある一点だけ。先ほど言ったように、配水池の機能というのは、一般家庭が多く使うときにはどちらかというとも水位を減らして多く出すと。皆さんが使っていない時間帯というのはむしろ水位を上げてどちらかというともため込むということで、ここにハイウォーターレベルと書いてあるのを見にくいので拡大したのですが、50.8と書いてあります。これが標高になります。ということで、50.8メートルのところを最大に水位が上がったときの高さということになります。あと、ベンチレーターって、ここの図面に一応書いてあるのですが、実は現地も設置がわからないのです。これは換気口になりますので、そういうものが当時あったということになります。ポイントですが、先ほど言ったように大震災を受けてできた施設になりますので、地震に強い施設ということを前提に設計がなされていますので、円形にしたのは、震災にも比較的強い円形構造にしたという記録が残っています。

こちらが内部の写真です。中に入っていたらこういう世界が広がっていただろうということですが、ドーム状のところから入っていくとこういう施設がありまして、そこからのぞくと、さっき言ったようにぐるぐると水が回っていく水路になる部分の壁が広がっているということで、こういう壁が無数にあると。円形ドームの一番下まで行くと円形の部分があって、最終的にはポンプで真ん中から吸い上げるという施設になっています。大体照明を消すと、こういう暗い地下の迷宮みたいなところが広がっているところがあります。これについては耐震診断で耐震性上NGが出てしまって、中には入れないということになりますので、上からになります。

これが、距離や配置は今も変わりませんが、上から配水池を見た写真になります。今は草があつたりするので、設置当時の写真で説明します。まず、エリアとしてはピンク色のエリアです。当時の配水池はこのエリアです。まず、着水井という、先ほど言ったように西谷浄水場から水を一回受けとめて、次に配水池という、2池ありますが、そちらに水を入れると。最終的にある程度ため込んだものを、配水井といってありますが、上の井戸から円に入れて街に送り込むということになります。最初、西谷から入ってきて着水井に入った水が外側から配水池に入ると。そこで内側から配水井に入れて、最終的には関内、いわゆる街のほうに送っていくということになります。

これが工事、円形の配水池をつくったときの写真になります。ポイントですが、後ろの部分を見ていただくと、コンクリートの擁壁が見てとれると思います。これについては、最初に申し上げましたように野毛山浄水場の濾水池、いわゆるろ過池の中につくりましたということで、当時の擁壁が見てとれると思います。

こちらを見ていただくとわかるのですが、相当鉄筋を頑丈に設置してしまっていて、かなり耐震性にも気を使ったものだと思います。これについては、工事がある程度進んできて、円形の部分と右のほうのところを見ると、先ほど壁の部分の中のところの写真をごらんいただきましたが、その部分が見てとれると思います。ああいう壁が中にぐるぐる回っているという状況になります。外側には円形のもの、補強のための構造のものが出ているということになります。

これは完成したときの写真です。記念写真を撮っているということになります。

これが、先ほど青木先生からもお話があったように、いわゆる野毛山公園が遊園地として使われていたときの航空写真になります。上のほうが旧野毛山配水池になりまして、遊園地のゴーカートがあつたりというのが見えると思うのですが、遊園地のちょっと右側のところに観客席みたいなものが見えるところがあると思います。こちらは野毛山プールです。もしかしたらご存じの方や入った方もいらっしゃるかもしれませんが、観客席のプールがありまして、こちらについては平成19年ぐらい、最近までありました。敷地は今でもわかりますので、もしご興味ある方はこちらの敷地跡地を見ていただければと思います。

先ほどの配水池に戻りますが、今日は復元したのが見られると思うのですが、こういう漢字4文字のレリーフというか、記念の文字が刻まれております。これについては右から左に読みますが、「清冽」冷たくて清らかなという意味のようですが、「無窮」というのは永遠にということ、永遠に清らかで冷たい水を送り続けようという、当時の水道マンの気持ちというか、そういうことが刻まれているということです。最近、記念事業とかでこういうものを設置するということはたまにあるのですが、こういうものを施設に、当時のエンジニアの思いみたいなものを残していくというものは珍しいというか、しっかり残っているという状況にあります。

今の状況ですが、野毛山の配水池というのは今もあります。ありますというのは、現役の配水池と、今日見ていただく引退した配水池が両方ありまして、実は野毛山の配水池が手狭になって、遊園地のような公園が設置されていた場所には新たな配水池の設置をしました。こちらが今の園内図です。広場のところのほとんどの部分を使った今の野毛山配水池です。こちらは現役の野毛山配水池で、関内とかみなとみらいとか、今も横浜の中心部に水を送っている施設というのは、現役のほうの野毛山配水池と。今日見ていただく野毛山配水池については引退しました。

最後にということで、野毛山配水池については、前身である野毛山浄水場が置かれていまして、それはもうまさに横浜に引かれた近代水道創設時に整備された、日本で最初の浄水場ということです。関東大震災で壊滅して、施設が西谷に移った後も、配水池としての役割を担ってきて、今も横浜の中心街への水を送っているということになります。野毛山というのは水道の世界では大事な土地というか聖地ということで、本当は中に入ってくださいと地下の迷宮みたいなものが見えるところではありますが、先ほどの写真などをイメージしながら、ぜひ現地を見ていただければと思います。私からは以上でございます。

## 挨拶・連絡事項

横浜市都市整備局都市デザイン室 室長 梶山祐実

## 第1部 終了





野毛町 鈴木真一撮影 明治初期 横浜開港資料館所蔵

7



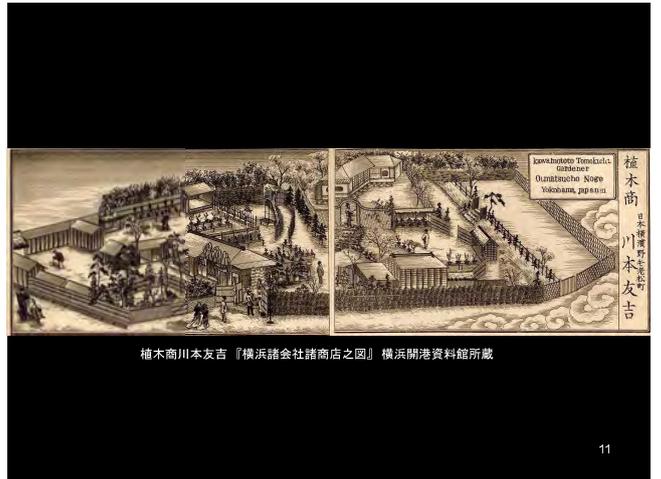
「横浜野毛山窟蟻織亭掛額句合」明治10年 横浜開港資料館所蔵・石井光太郎文庫

10



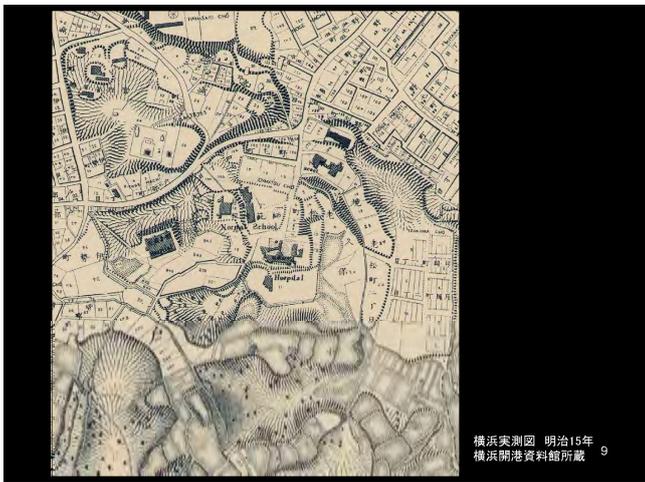
十全醫院 "the Far East"(1874.7.31) 横浜開港資料館所蔵

8



植木高川本友吉『横浜諸会社諸商店之図』横浜開港資料館所蔵

11



横浜実測図 明治15年 横浜開港資料館所蔵

9



野毛山の桜 横浜開港資料館所蔵

12



野毛山の桜 横浜開港資料館所蔵

13



野沢屋別邸『横浜諸会社諸商店之図』横浜開港資料館所蔵

16



野沢の菊 横浜開港資料館所蔵

14



亀屋野毛山別邸『横浜諸会社諸商店之図』横浜開港資料館所蔵

17



野沢屋別邸『横浜諸会社諸商店之図』横浜開港資料館所蔵

15



原家野毛山別邸 洋館 三溪園保勝会所蔵

18



「最新調査番地入 横濱新地圖」 大正8年 横浜開港資料館所蔵



1/10000地形図 大正11年 横浜開港資料館所蔵



平沼尊藏別邸 『日本博覧図 第十二編 全国之図』(明治30年)



『神奈川県官民人名録』 明治27年 横浜開港資料館所蔵





市長公舎

『前川謙三写真帖』より 横浜開港資料館所蔵

31



野毛山水道

『前川謙三写真帖』より 横浜開港資料館所蔵

34



平沼氏表門

『前川謙三写真帖』より 横浜開港資料館所蔵

32



『横浜市公園配置図』(部分) 『帝都復興事業誌 建築篇・公園篇』 横浜開港資料館所蔵

35



野毛山

『前川謙三写真帖』より 横浜開港資料館所蔵

33



『復興公園写真』(昭和5年頃) 横浜都市発展記念館所蔵

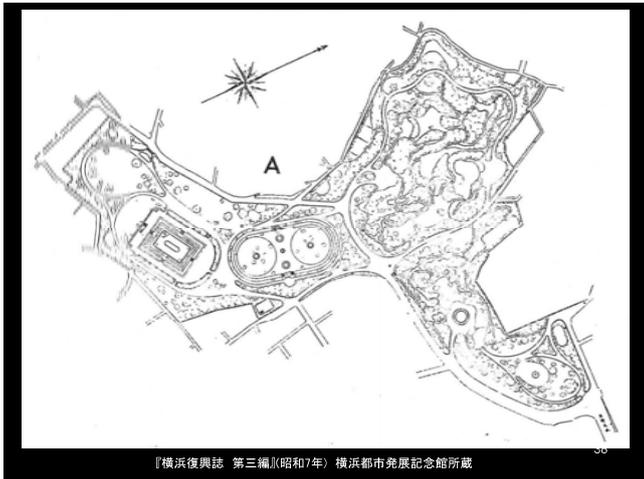
36



『復興公園写真』(昭和5年頃) 横浜都市発展記念館所蔵



野毛山公園 横浜都市発展記念館所蔵絵葉書



『横浜復興誌 第三編』(昭和7年) 横浜都市発展記念館所蔵



『復興公園写真』(昭和5年頃) 横浜都市発展記念館所蔵



野毛山公園 横浜都市発展記念館所蔵絵葉書



Nojima Park at Yokohama. 橋石 園公山毛野濱横

野毛山公園 石橋 横浜都市発展記念館所蔵絵葉書



野毛山公園の花壇 横浜都市発展記念館所蔵絵葉書

43



『天德行幸写真帖』より 横浜市史資料室所蔵

46



野毛山配水池 横浜都市発展記念館所蔵絵葉書

44



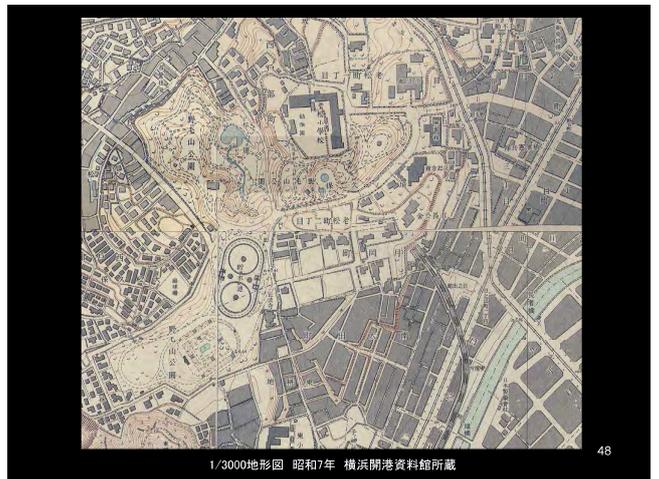
『天德行幸写真帖』より 横浜市史資料室所蔵

47



『天德行幸写真帖』より 横浜市史資料室所蔵

45



1/3000地形図 昭和7年 横浜開港資料館所蔵

48



(After Great Earthquake) Nogenachi-dori, Yokohama  
 通町毛野濱横  
 震災後の野毛町 横浜開港資料館所蔵絵葉書

49



震災記念館 『復興記念写真帖』(昭和4年)より 横浜都市発展記念館所蔵

52



老松小学校 昭和13年頃 横浜都市発展記念館所蔵

50



(1) The Commemoration hall of Yokohama. 館念記災震市濱横

2代目震災記念館(本町小学校) 横浜市中心図書館所蔵絵葉書

53



『横浜市図書館概要』(昭和2年)より 横浜市中心図書館所蔵

51



(2) Aino, 11:58 a.m. September 1st 1923

日一月九年二十正大 噫!! 十一時五十八分

2代目震災記念館の内部 横浜市中心図書館所蔵絵葉書

54



55



老松小学校 昭和13年頃 横浜都市発展記念館所蔵

58



徳永柳洲『横浜の壊滅』  
東京都復興記念館所蔵



JAPAN FOREIGN TRADE FAIR 1949 (日本貿易博覧会) 野毛山会場 全景

日本貿易博覧会記念絵葉書 横浜都市発展記念館所蔵

59



関東大震災時、海上で救助にあたった  
日本郵船三島丸の鐘  
『横浜グラフ』(昭和9年)  
横浜都市発展記念館所蔵

57



JAPAN FOREIGN TRADE FAIR 1949 (日本貿易博覧会) 野毛山会場演藝会場 天文館

日本貿易博覧会記念絵葉書 横浜都市発展記念館所蔵

60



開会式『貿易と産業』(昭和25年) 横浜市中央図書館所蔵



野毛山遊園地入口 昭和28年4月 横浜開港資料館所蔵・広瀬始観撮影写真



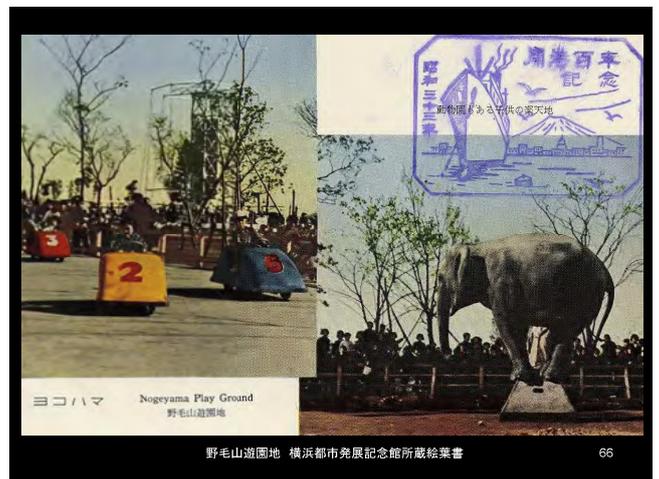
子供動物園『貿易と産業』(昭和25年) 横浜市中央図書館所蔵



豆電車 昭和35年 横浜市史資料室所蔵・広瀬謙写真資料



『よこはま野毛山遊園地』(昭和30年頃) 横浜市史資料室所蔵



野毛山遊園地 横浜都市発展記念館所蔵絵葉書



あすをひらく横浜展

〈動きだした6大事業〉パネル展示  
10月27日(日)・11月3日(日・祭)  
野毛山公園展望台周辺

■会場には、期間中、市の特殊用途車両(消防はしご車、水筒四用消防車、各種検診車など)を展示します。

■市内中高校生の「私たちの横浜写真コンクール」入賞、入賞作品の発表展示会を開催します。(期間中)

10月27日同時オープン

動物の広場 野毛山公園展望台周辺  
(中身の動物たちを詳しく紹介します)

新しい猫の家完成 野毛山動物園内  
●お楽しみつき! 10月26日・27日  
(1時から入場まで無料)

野毛山公園管理用入場券募集 317号 市民広報  
10月24日・25日・27日 印刷部発行(発行部数100部) 電話2256 10月24日 横浜新聞



飛鳥田一雄市長 昭和42年  
横浜都市発展記念館所蔵・五十嵐英壽撮影写真

広報ポスター「あすをひらく横浜展」  
昭和43年  
横浜市史資料室所蔵

73



歩道橋開通式 昭和46年 横浜市史資料室所蔵・広報課写真資料

76



「あすをひらく横浜展」会場風景 昭和43年 横浜市史資料室所蔵・広報課写真資料

74

みんなで市政を話し合おう

1万人市民集会  
とき/10月22日(日)1時  
ところ/横浜市文化体育館

主催/1万人市民集会実行委員会



1万人市民集会 昭和45年  
横浜都市発展記念館所蔵・五十嵐英壽撮影写真

ポスター「1万人市民集会」  
昭和42年 横浜市史資料室所蔵

75

野毛山はどうしてハマっ子の憩いの場になったのか

2019/08/04 青木祐介

1. 幕末・明治の野毛山

- ・野毛の切り通し → 開港場への入口 【佐久間象山顕彰碑】  
十全医院（明治7年）、老松学校（明治10年）、老松町の設置（明治9年）
- ・市民に開かれた遊興の地  
花屋敷「四時皆宜園（しじかいぎえん）」と茶店「窟蟻蟻（くつろぎ）」の開園（明治9年）  
野毛山の桜、茂木邸の菊花
- ・港を中心に山手と対照的な位置にある丘陵地  
日本人豪商たち（原善三郎、茂木惣兵衛）の住まいへ 【旧平沼専蔵別邸亀甲積擁壁】

2. 近代水道と野毛山

- ・野毛山浄水場の設置（明治20年） 【パーマー胸像】  
→ 関東大震災後に浄水場から配水池へ（昭和2年） 【野毛山配水池】

3. 野毛山の震災復興

- ・野毛山公園の誕生（大正15年）  
原邸・茂木邸の跡地を利用した震災復興公園、日本庭園・西洋庭園・折衷庭園の構成  
復興記念祝賀式典（昭和4年）
- ・文教エリアの形成  
横浜市図書館（昭和2年）、横浜市震災記念館（昭和3年）、老松小学校（昭和4年）

4. 戦時下の野毛山

- ・陸軍による接収と高射砲陣地の設置（昭和16年） → 市民の立ち入り禁止
- ・老松国民学校、図書館他への市庁舎の疎開（昭和19年）

5. 戦災復興と野毛山

- ・日本貿易博覧会の開催（昭和24年）  
野毛山会場と神奈川会場（反町）、神奈川会場に「動物園」開場
- ・野毛山遊園地の開園（昭和26年） → 野毛山公園の継承（大池、園路）

6. 高度経済成長の時代を経て

- ・配水池整備のため遊園地の閉鎖（昭和39年） → 動物園は入園無料に  
野毛山遊園地から野毛山動物園に改称（昭和47年）
- ・歩道橋の建設（昭和46年） 【野毛のつり橋】  
飛鳥田一雄市長の「一万人集会」をきっかけとして設置  
設計：柳宗理（やなぎそうり） → つり橋以外に公園内の標識デザインも担当



四時皆宜園（明治 10 年） 横浜開港資料館所蔵



野毛山浄水場（明治 20 年） 横浜開港資料館所蔵



1/10000 地形図（大正 11 年） 横浜開港資料館所蔵



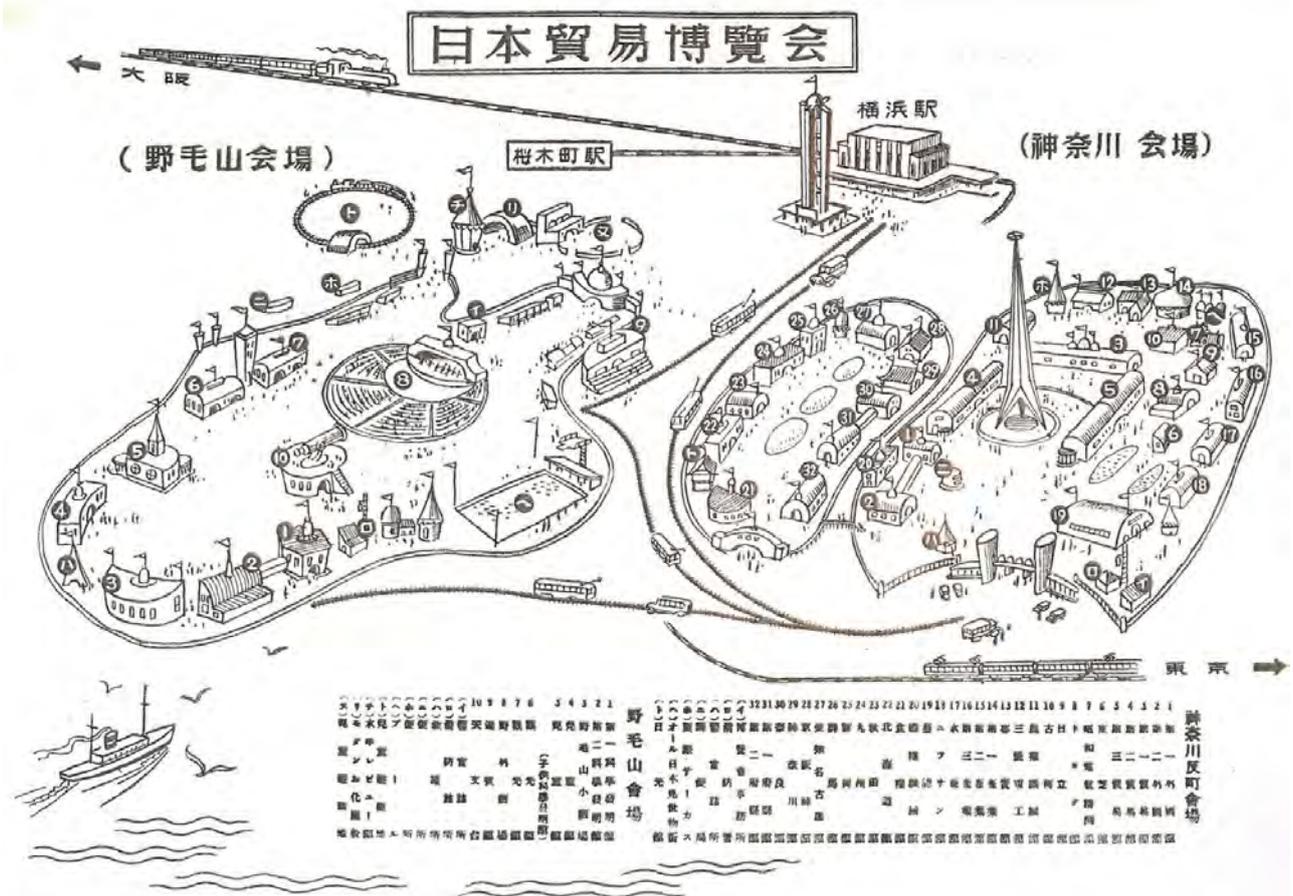
亀屋野毛山別邸（『横浜諸会社諸商店之図』収録） 横浜開港資料館所蔵



1/3000 地形図（昭和7年） 横浜開港資料館所蔵



野毛山公園・野毛山配水池（昭和戦前期） 横浜都市発展記念館所蔵



『日本貿易博覧会』(昭和 24 年) 横浜市中央図書館所蔵



『よこはま野毛山遊園地』(昭和 30 年頃) 横浜市史資料室所蔵

# 野毛山配水池の歴史

横浜市水道局 中村水道事務所長  
寺井 宏治

## 水道の仕組み

まずは今回ご説明する、野毛山配水池の役割について説明します。



### ●本日の説明

1. 「配水池」ってなに？  
水道の仕組み(取水からお客様の蛇口まで)
2. 近代水道創設
3. 野毛山浄水場(貯水場)【野毛配水池の前身】
4. 震災からの復興(横浜水道の再建)
5. 野毛山配水池について

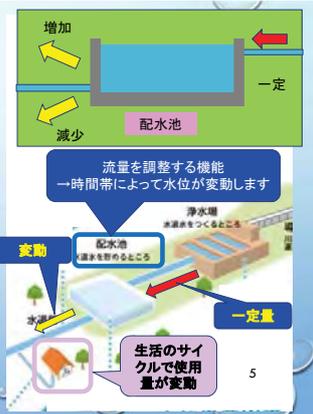
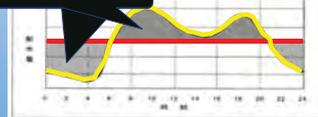
## 配水池の役割

配水池には「通常時の役割」と「非常時の役割」がありますが、そのうち、**通常時**の役割としては

「**時間変動調整機能**」があります。

一日の水需要は、深夜は少なく、朝夕にピークが現れるパターンで変動します。浄水場は、ほぼ一定量で処理するのが効率的ですので、昼間の多使用時の水量を夜間に蓄えておく**バッファー(緩衝)**が必要です。この浄水量、送水量と変動する排水量を調整するのが配水池の基本的な役割です。

**バッファー(余裕、緩衝)が必要**

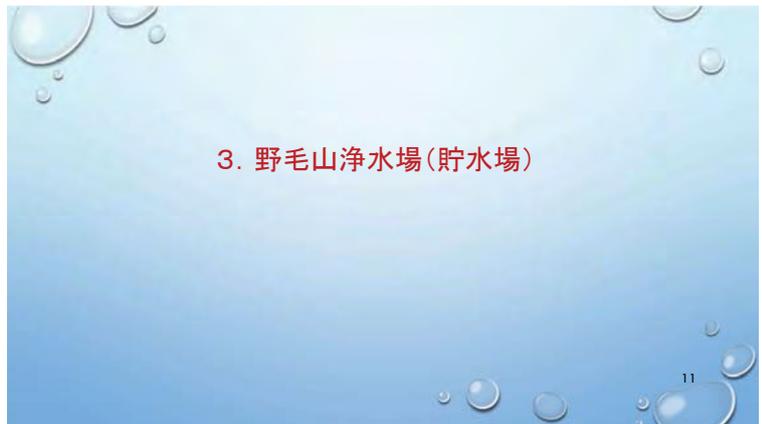


## 1. 野毛山配水池の「配水池」ってなに？

水道の仕組み(取水からお客様の蛇口まで)

## 2. 近代水道創設

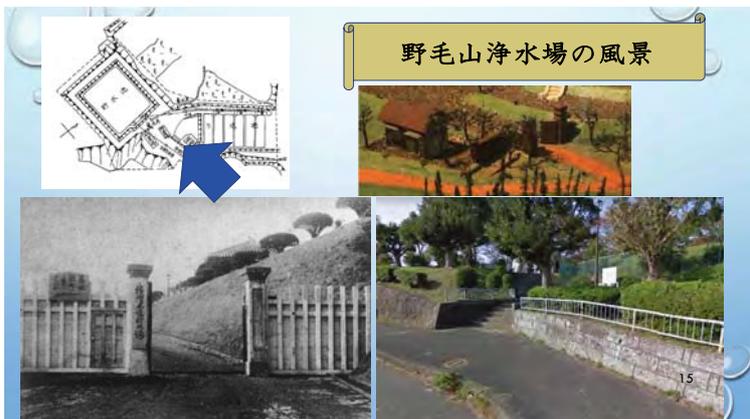
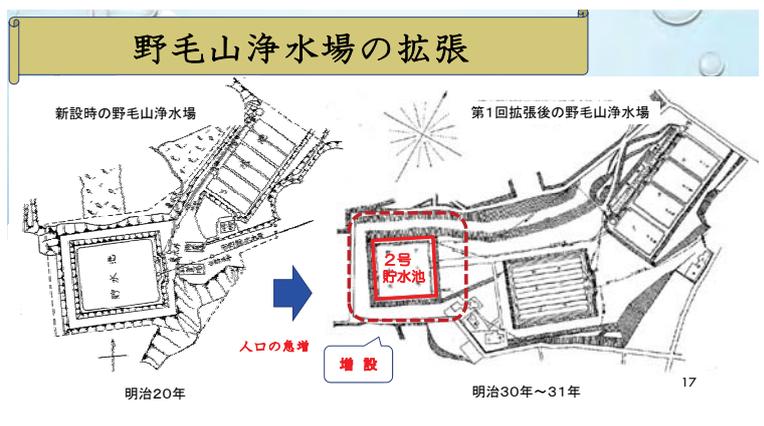
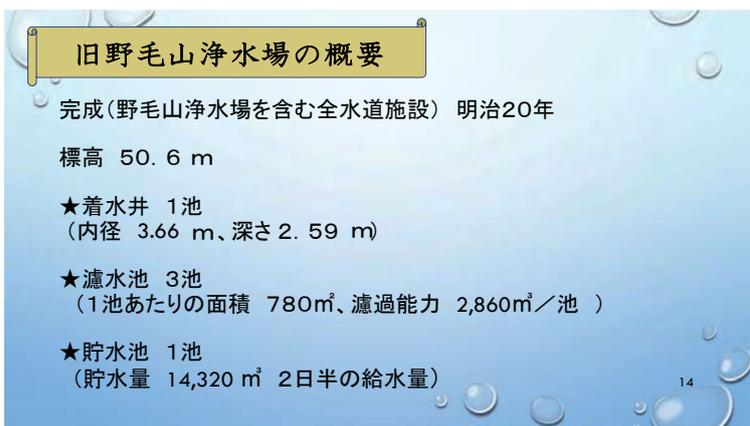
(野毛山浄水場(後の野毛山配水池)ができた背景)

**①浄水場の設置場所**  
海水平平均水位上少なくとも140フィート(海拔43M)の高さを有する貯水所を設け、当初は日量140万ガロンを流入させることから、貯水所予定地は野毛山の山頂或いはその近辺とした。

**②水源の選定**  
自然流下により水を得ることが管理上も経費的にも有利であることから、横浜においても140フィート(海拔43M)の高度に自然流下(重力法)で導水し得る水源は近傍にはなく、遠隔の地に求めざるを得ないという視点に立ち、その水源として「多摩川の谷保付近」か「相模川の中野村付近」を選定して、総合的に相模川を選定した。





## 関東大震災

関東大震災により野毛山浄水場は完全に破壊されて、修理は不可能。

被害の状況



宮川橋（保土ヶ谷区）



破壊された野毛山浄水場

## (旧) 野毛山配水池の概要

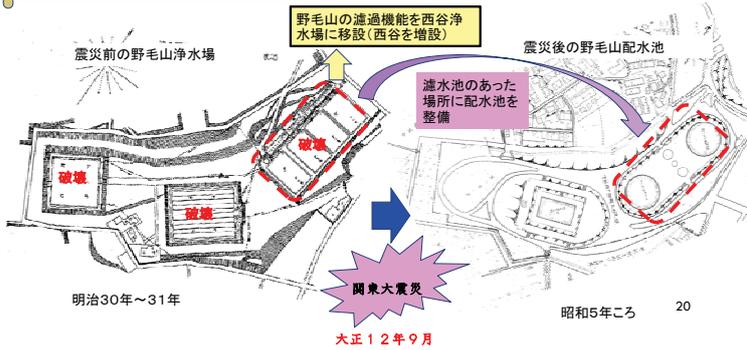
工事着手 大正14年 2月  
完 成 昭和 2年 3月（約2年間）

★円形配水池（鉄筋コンクリート造り）2池  
（内径41.25m 深さ6m 有効貯水量 6,850m<sup>3</sup>/池）

★着水井（鉄筋コンクリート造り）1池  
（内径5.5m 深さ4.803m）

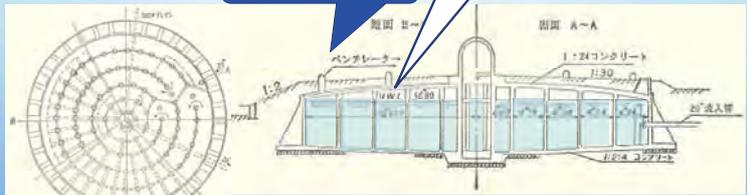
★配水井（鉄筋コンクリート造り）1池  
（内径5.5m 深さ8.73m）

## 野毛山配水池の整備



## 円形配水池の施設図

### 円形配水池



**設計のポイント!** 大震災の教訓から、配水池の周壁には円形構造を採用

## 5. 野毛山配水池について

## 円形配水池の内部

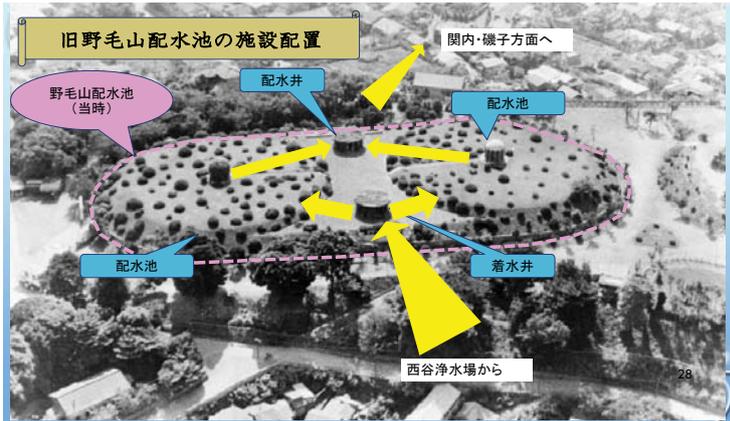


円形配水池の内部



25

旧野毛山配水池の施設配置



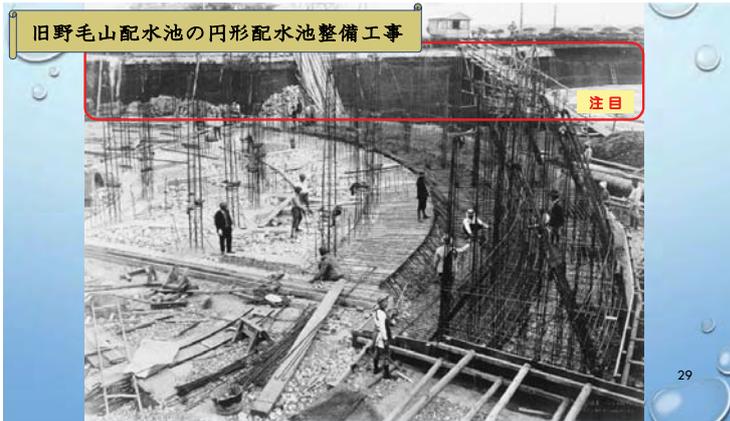
28

円形配水池の内部



26

旧野毛山配水池の円形配水池整備工事



29

円形配水池の内部



27

旧野毛山配水池の円形配水池整備工事



30



旧野毛山配水池の円形配水池整備工事



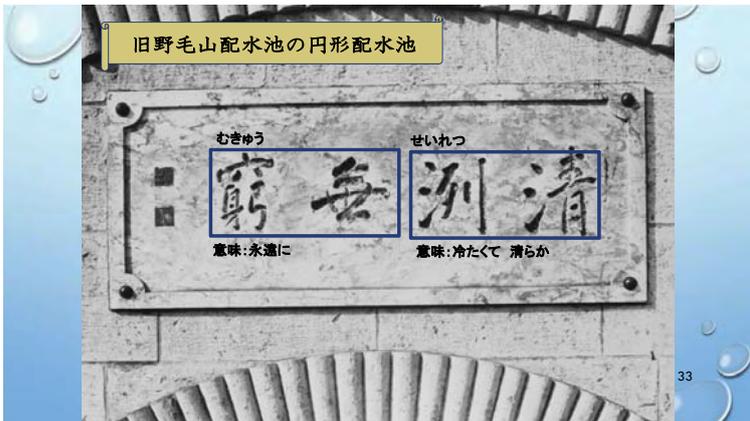
新たな配水池の整備



旧野毛山配水池と野毛山遊園地、野毛山プール



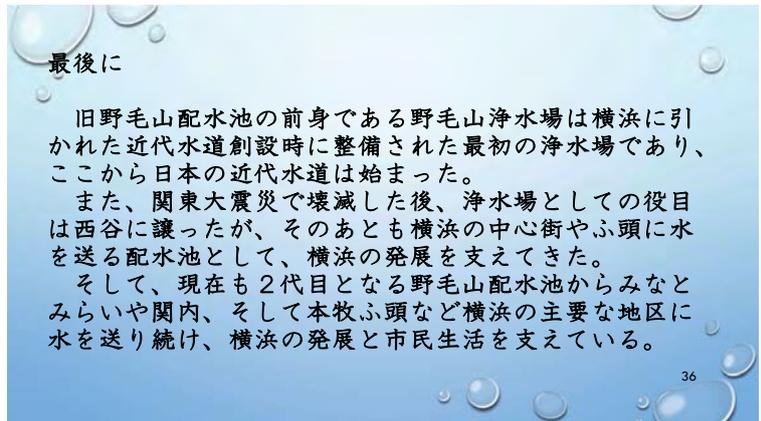
6. 最後に……



旧野毛山配水池の円形配水池

むきゆう せいりつ  
窮無 洲清

意味:永遠に 意味:冷たくて 清らか



最後に

旧野毛山配水池の前身である野毛山浄水場は横浜に引かれた近代水道創設時に整備された最初の浄水場であり、ここから日本の近代水道は始まった。  
 また、関東大震災で壊滅した後、浄水場としての役目は西谷に譲ったが、そのあとも横浜の中心街やふ頭に水を送る配水池として、横浜の発展を支えてきた。  
 そして、現在も2代目となる野毛山配水池からみなどみらいや関内、そして本牧ふ頭など横浜の主要な地区に水を送り続け、横浜の発展と市民生活を支えている。

ご清聴ありがとうございました。



### (3) ミニツアー

講演終了後に、会場の横浜中央図書館から野毛山旧配水池までを、にしくシティガイドグループによる歴史ガイド。旧配水池の敷地内では水道局職員から解説があった。

#### ① にしくシティガイドグループによる野毛山公園内のガイド

野毛山公園案内板前では、野毛山公園と歴史の概要を説明。また、生糸や金融などで財をなした豪商・平沼専蔵の屋敷跡に今も残る「旧平沼専蔵別邸亀甲積擁壁及び煉瓦塀」（横浜市認定歴史的建造物）についても説明。



中村汀女句碑では、昭和を代表する女流俳人であった中村汀女の句について解説した。



水が流れている木橋。眼下には日本庭園の池をのぞむことができる。



続いて、幕末の開国論者として有名な佐久間象山の記念碑。



野毛のつり橋。インダストリアルデザイナーとして有名な柳宗理によるデザインである。



② 水道局職員による、野毛山旧配水池の上部に入っの説明。

講演で説明された内容を、現場にて説明した。なお、通常は立入が禁止されているものの、水道局の厚意により、旧配水池の敷地内に入って説明をいただくことができた。

配水池は二池の円形水槽で構成されている。地上部に出ているドーム状の2つの塔や、その地下の円形水槽の構造について、図面などを用いて説明。階段正面にある「清冽無窮」の銘文などの紹介も行った。





<ミニツアー ルート図>

## (4) 当日配布資料

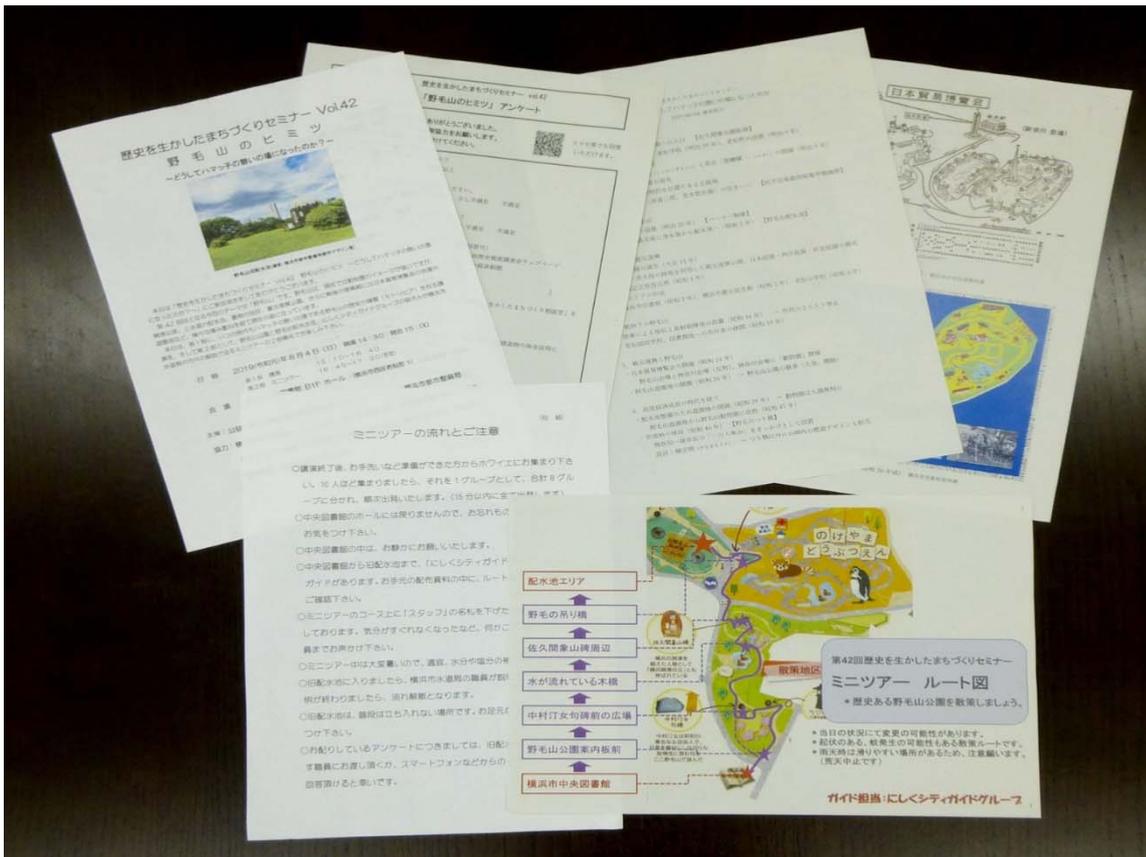
歴史を生かしたまちづくりセミナーVol. 42

野毛山のヒミツ～どうしてハマっ子の憩いの場になったのか？～

配布物

<セミナー 本資料>

- プログラム (表: タイトル、クレジット等 裏: プログラム)
- アンケート (オモテのみ)
- 講演1 (青木祐介) レジюме+資料 (表裏計4枚、1枚目: レジюме、2~4枚目資料)
- ミニツアーの流れとご注意 (オモテのみ)
- ミニツアールート図 (オモテのみ)



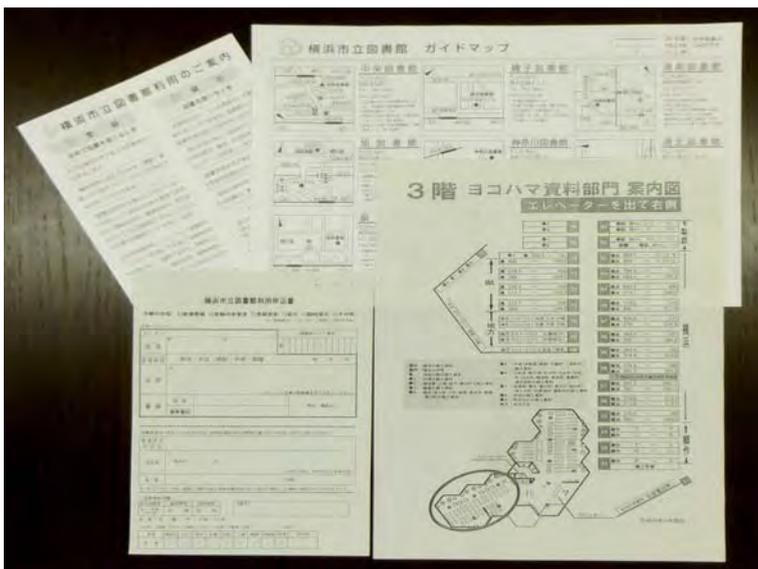
<主催者ご案内関連>

- ヨコハマヘリテイジご案内 (オモテのみ)
- 歴史を生かしたまちづくりファン ド チラシ
- 歴史を生かしたまちづくり相談室のご案内 (表: ご案内、裏: 相談シート)
- 歴史を生かしたまちづくり ふるさと納税 チラシ



<協力先等ご案内>

- 横浜都市発展記念館 一枚の切符から昭和のあの頃へ チラシ
- 一枚の切符から昭和のあの頃へ ワークショップお知らせ (A5、オモテのみ)
- 『にしくシティガイドグループ』のご紹介 (A4、オモテのみ)
- 歴史と芸術文化の丘 掃部山を知ろうガイドツアー チラシ (オモテのみ)
- 横浜近代水道創設 125年 パンフレット (A5 二つ折り)
- 野毛山動物園
  - ・つがるさん ポストカード
  - ・ナイトのげやま 2019 チラシ (生ビール割引券) はがき大
  - ・野毛山公園ガイドマップ
  - ・野毛山動物園園内マップ
  - ・のげやまどうぶつえんリーフレット
  - ・one zoo チラシ
  - ・よこはま夜の動物園 2019 チラシ
- 横浜市図書館
  - ・横浜市立図書館利用のご案内
  - ・横浜市立図書館ガイドマップ
  - ・横浜市立図書館利用申込書
  - ・横浜市立中央図書館 3階 (一般調査部門、ヨコハマ資料部門) 案内図



以上

### 3 アンケート様式・集計



## アンケート集計結果について

### 実績

終了後のアンケート回答数:33 件

※紙:22 件、電子申請:11 件。回収方法:セミナー終了後に回答を得た。

### 結果のまとめ

- 今回は歴史セミナーで初めて小学生を無料とし、親子連れもターゲットの一つとした。結果的に6組の親子連れに参加いただき、通常の歴史セミナーよりも若い客層に来ていただけた。
- 歴史セミナーは毎年開催しているが、今回は87.9%が初参加
- セミナー全体の満足度が「満足」・「まあ満足」が96.7%、ミニツアーの案内については同100%
- どこで知ったかについては「横浜市 HP」が最も多く、次いで「その他」の SNS・Twitter が5件となったことから、インターネットによる広報が効果的であったことがわかる。
- 歴史を生かしたまちづくりについては、一般の市民の方にまだまだ知っていただく余地が多く、今後も市民向けの広報機会である本セミナーを活用していきたい。今回はにしくシティガイドグループ、水道局など、様々な方々の協力を得ることができ、非常に満足度の高い結果を得ることができた。

### アンケート結果の分析

参加者の半数弱から回答を得た。20-30 歳代がわずかながらも一番多い年齢層であり、通常の歴史セミナーよりも若い客層に来ていただけた。また横浜市の在住在勤者は約 1/4 と多めである。

内容としては87.9%が歴史セミナー初参加者である(20-30 歳代に限っては、11人中10名が初参加)。セミナー全体の満足度が「満足」・「まあ満足」が96.7%、ミニツアーの案内については同100%であった。どこで知ったかについては「横浜市 HP」が最も多く、次いで「その他」の SNS・Twitter が5件となったことから、インターネットによる広報が効果的であったことがわかる。自由記述欄については、「今後のセミナーで取り上げてほしいところ」では、幅広い意見が寄せられた。最後の「セミナーへの感想」では、楽しかったという意見が多く、普段は入れない旧配水池に入れたことやミニツアーへの高評価が目立った。一方、ホールのマイクへの不満や、冒頭挨拶を短くしてほしいなどの意見があった。

以上のことから、講演だけでなく実際の現場見学を組み合わせるスタイルは参加者の満足度を高めるものであり、引き続き重要な点である。一方で、「ミニツアーが短い」、「暑かった」などという意見もあり、例年上半期に開催している歴史セミナーとしては、時期と気候は要検討事項である。

### 回答者の属性

#### 性別

男性	16
女性	15
空欄	2

#### 在住又は在勤地

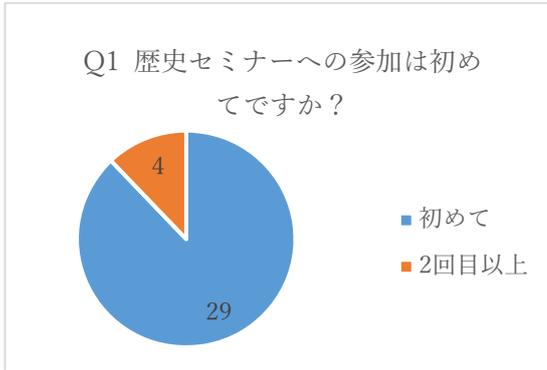
横浜市	24
横浜市外	7
空欄	1

#### ご年齢

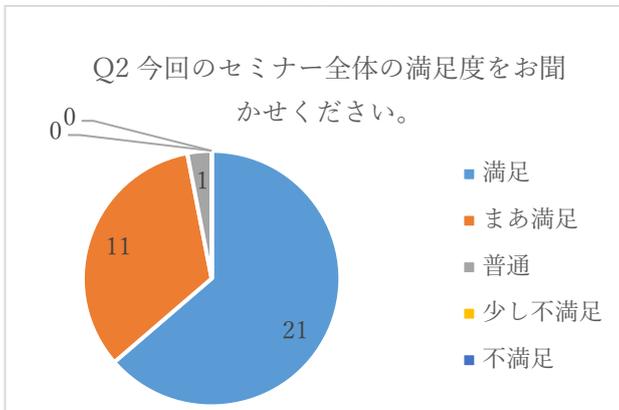
20 歳未満	1
20-30 歳代	11
40-50 歳代	10
60~70 歳代	9
80 歳代以上	0
空欄	2

内容

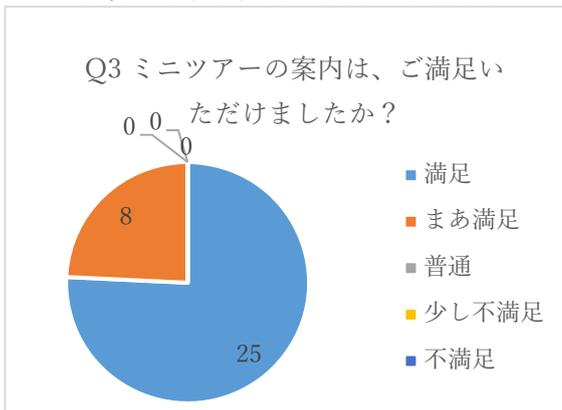
Q1 歴史セミナーへの参加は初めてですか？



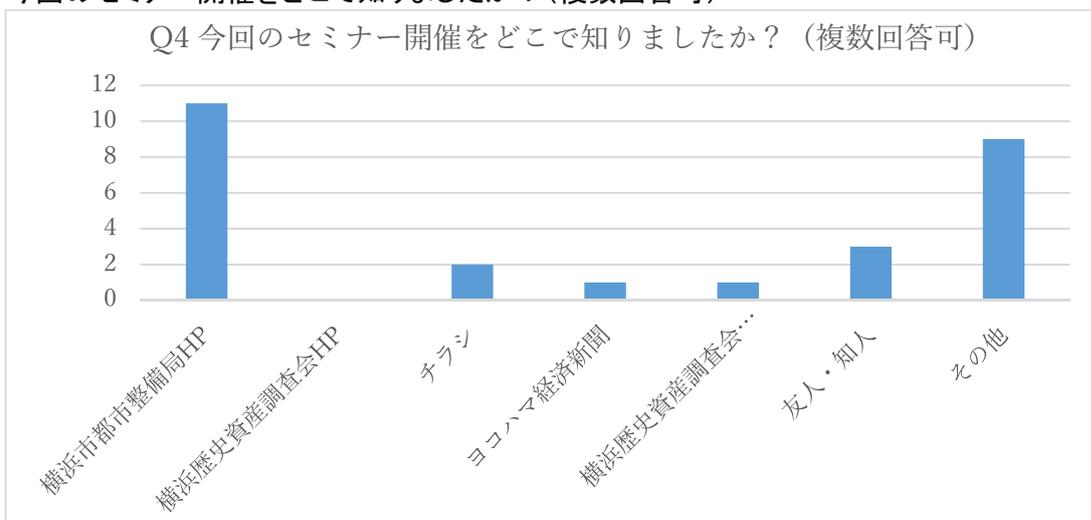
Q2 今回のセミナー全体の満足度をお聞かせください。



Q3 ミニツアーの案内は、ご満足いただけましたか？



Q4 今回のセミナー開催をどこで知りましたか？（複数回答可）



※その他：SNS(3件)、Twitter(2件)、横浜シティガイド協会(2件)、よこはま

Q5 横浜歴史資産調査会が横浜市と連携して運営している「歴史を生かしたまちづくり相談室」をご存知でしたか？



Q6 横浜市のふるさと納税（横浜サポーターズ寄附金）に、横浜の歴史的建造物の保全活用の特化したメニューがあることをご存知でしたか？



Q7 今後、セミナーで取り上げてほしいテーマや内容はありますか？ ※コメント数:13 件

かもん山付近の地下水について	今回同様、普段入れない場所を紹介してください。	街並みの保存について
水道施設、港湾施設など。	横浜の歴史ならなんでも	水道道について広域に
西谷、鶴見のねぎぼうず	米軍空襲当時、進駐軍の様子など	日ノ出町の歴史
鉄道とか船の歴史に関連したセミナーや山手の話を聞いてみたいです。	横浜の飛行場	東小近くの歴史
市電、公園、みなとみらい地区		

Q8 今回のセミナーについて、ご感想をお聞かせください。 ※コメント数:24 件

主催者挨拶はもっと短くて良いと思いました。	マイクがなく、司会の言葉が聞き取りにくい。
配水池内を見たかったです	楽しかったです。横浜育ちですが教わっていないことです(汗)
野毛山の歴史がわかって楽しかった夏場より、冬に実施した方が、蚊がいなくてよかったかも。	続けてください。
普段入ることのできない野毛山配水池の見学ができ大変有意義でした。また興味のあるテーマがあれば参加したいと思います。	今回のセミナーを知ってびっくりしています。
一番始めの挨拶の話が聞き取りにくく、何を話しているかわからなかった。	丁寧に説明いただきました。音響が悪い(ホール聞きにくい)、挨拶が多い、質問の時間があると良い
後半は子供も楽しめた。	ミニツアーに参加できて良かったと思います。
欲張りすぎかな。ミニツアーが短い。	特に水道の貯水池の中を見学できて楽しかったです。
暑い中でしたが、初めて聞く話が多く、とても勉強になりました。ありがとうございました。	とても良かった。
司会の方にマイクがあっても良かったかも。	楽しかった。
話を聞くだけではわからなかったことも、実際歩いてみることで理解の助けになった。	お手洗い休憩が欲しかったです。
震災後原さんの土地と茂木さんの土地がどうして公園用地になったのか経緯が知りたいです。	とても勉強になった。見学は雑草のない季節が良いかなと。
いつも歩いている野毛山を深く知ってまた歩きに行くのが楽しみになりました。配水池は前から気になっていたのもとても興味深く水道の大切さも改めて感じる事ができました。時間も延長して対応してくださってありがとうございました。	初めて参加しました。柵越しでしか見られなかった配水池に近づけて感激です。セミナーも説明も分かりやすく、また子供と参加したいと思いました。ありがとうございました。

## 4 セミナーちらし

第42回歴史を生かしたまちづくりセミナー

# 野毛山のヒミツ

どうしてハマっ子の憩いの場になったのか？



2019.8.4 15:00~

会場：横浜中央図書館



講演&ミニツアー

普段入れない野毛山旧配水池のガイド付き！



豪商の亀甲積擁壁



水道技師パーマー像



野毛山動物園

## 概要

日付 2019年8月4日(日)

会場 横浜中央図書館 B1Fホール  
横浜市西区老松町1

時間: 15:00~17:30  
(開場 14:30)

費用 500円  
横浜ヘリテージ会員:300円  
小学生は無料

定員 80名  
事前申込制・7/22 締切  
応募多数で抽選、  
小学生は要保護者同伴

※お申込・詳細は裏面へ

## プログラム

1 講演 15:00-16:30

- ①「野毛山はどうしてハマっ子の憩いの場になったのか」  
青木 祐介 (横浜都市発展記念館 副館長/横浜市歴史的景観保全委員)
- ②「野毛山配水池の歴史」  
寺井 宏治 (横浜市水道局中村水道事務所長)

2 ミニツアー 16:40-17:30

会場から野毛山旧配水池まで、にしくシティガイドグループによる歴史ガイド。旧配水池の敷地内では水道局職員から簡単な説明もあります。  
※大雨の場合、ミニツアーのみ中止することがあります。

## ポイント

- ・野毛山動物園の道路の反対側に、普段は立入禁止の野毛山旧配水池があります。今回は特別にその敷地内に入ることができます。
- ・開港以来の横浜発展の経緯が学べ、**夏休みの自由研究にも最適**です。
- ・本セミナー終了後、帰りがけに野毛山動物園へぜひ。ズーラシアだけでなく、8月土休日は夜も20:30まで開園しています。

### ご注意

- ・暑い時期のため、お飲み物や帽子など暑さ対策をお忘れなく!!
- ・ミニツアーでは、階段・坂があり蚊もおります。歩き慣れた靴、服装、長ズボンなどで参加願います。

# 「歴史を生かしたまちづくりセミナー 野毛山のヒミツ」

横浜市では、昭和 63(1988) 年に「歴史を生かしたまちづくり要綱」を制定し、横浜の歴史的景観を形成している歴史的建造物の保全と活用を推進しています。また、市民の皆さんに広く歴史的景観や歴史的建造物の魅力を知ってもらい、親しんでもらうことを目的として、毎年「歴史を生かしたまちづくりセミナー」を開催しています。

テーマは「野毛山」。現在は動物園のイメージが強いですが、開港以来、上水道の配水池、豪商の別荘、震災復興公園、さらに戦後の復興期には日本貿易博覧会の会場や遊園地など、様々な積み重ねを経て現在の姿になっています。

今回は、いつの時代もハマっ子の憩いの場である野毛山の歴史の積層（≒トリビア）を知る講演と、野毛山公園と旧配水池をガイド付きで巡るミニツアーを含んだセミナーを開催します。



<お問合せ先>

公益社団法人 横浜歴史資産調査会 事務局

電話・FAX 045-651-1730

(月・水・金 9:00-17:00)

E-MAIL [yh-info@yokohama-heritage.or.jp](mailto:yh-info@yokohama-heritage.or.jp)

横浜市 都市整備局 都市デザイン室

電話 045-671-2023 FAX 045-664-4539

(月~金 8:45-17:15)

## 応募要領

### ◆申込方法

(1) 又は (2)、いずれかの方法で、「歴史を生かしたまちづくりセミナー受付事務局」あてに、必要事項を記載し、お申し込みください。応募者多数の場合は、抽選となります。

### ◆募集期間

令和元（2019）年6月26日（水）から同年7月22日（月）まで【必着】

### ◆参加者の決定

7月26日（金）に抽選結果を、(1)の方はeメール、(2)の方はFAXにて、返信・返送予定(電子申請でお申込みの場合、[tb-toshidesign@city.yokohama.jp](mailto:tb-toshidesign@city.yokohama.jp) から受信できるように設定してください)

### ◆申込み先

(1) 電子申請 下記ページ内の申請フォームから申込みください。

<https://www.city.yokohama.lg.jp/kurashi/machizukuri-kankyo/toshiseibi/design/>



(2) ファックス

下記申込書に記入の上、FAXにて申込みください。番号：**045-651-1730**

●歴史セミナー2019申込書

申込日 年 月 日

お名前			
性別	男性 ・ 女性		
FAX番号			
ご年齢	10歳代 ・ 20-30歳代 ・ 40-50歳代 ・ 60-70歳代 ・ 80歳以上		
同伴の方がいる場合、その氏名と年代			

※小学生は要保護者同伴